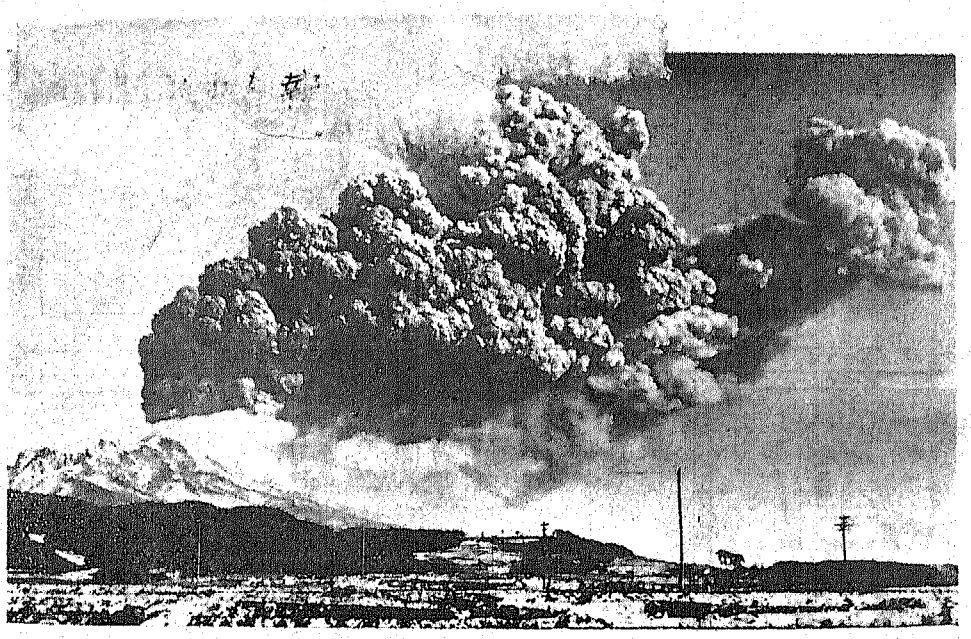
千曲會報

社團法人千曲會　第百二十七號　昭和十六年一月五日



目次

△表紙　爆發刹那の淺間山噴煙（十二月十九日）
△迎春所感……井上柳梧（一）
△合成纖維と石炭……大平敏彦（二）
△上田蠶絲專門學校報國團結成……（三）
△母校便り……（五）
○母校創立三十周年記念辯論大會
○學生の体力檢定
○行元教授「日本道德學」を著す
○產業報國精神特別講義
○學級主任設置
○皇紀二千六百年並に母校創立三十周年記念祭
△社團法人千曲會第一回總會……（七）
△千曲會電報暗符改正……（七）
△會員名簿に就て……（七）
△昭和十四年度千曲會收支決算表……（八）
△昭和十六年度千曲會收支豫算表……（一〇）
△本會記事……（一三）
○訪問支會役員改選
○向上資金醵金者
○銃後資金應募者
○會費領收
△敍任辭令……（一四）
△支會通信……（一五）
○群馬支會總會
○飯田兄の入營を祝して
△訃報……（一五）
○死亡會員
○弔慰金報告
○久芳大三君の靈に對して
○故田中精雄君を追想す
△會員動靜……（一七）

謹賀新年

昭和十六年元旦

上田蠶絲專門學校
職員一同

謹賀新年

昭和十六年元旦

在校千曲會員一同

迎春所感

井上柳梧

明治天皇御製

新しき年を迎へてふしのねの
　高きすがたを仰きみるかな

を拜誦し年を迎ふる毎に彼の高潔なる富士の高根を仰ぎていや高い望といや清い心とを以て來るべき年に勇しい歩を進ませんとするのである。

畏くも明治天皇は

わが國は神の末なり神まつる
　昔の手ふり忘るなよゆめ

と仰せられ我國民は神の末であると謂ふ事を國民に御示し下されたのである。吾々は新年を迎ふるに當りて此尊い自覺に生きて日本精神に還へり古來の醇風美俗を生かして眞の日本の生活に再出發をしなければならぬのである。吾々は昔よりの習慣である一家を神のやどります社とあがめて玄關には注連繩を張り神籬に擬して門松を立てたのである。新体制の新年は千門萬戸漏れなく國旗と門松とを立てて光輝ある我歴史をしみ〴〵と忍びて國柄の尊貴を感謝し大政翼賛の心を益固くしなければならぬのである。

今や世界は大動亂の渦中にあり歐洲に於ては過去一年の中にポーランド、ベルギー、オランダ、フランス等多數の國が我々の目前に於て滅亡した。吾々は國家の滅亡すると謂ふ事は歴史に於て學び過古の歴史的の事柄を考へて居つたのに現に佛國の如き強大なる國が短日月の間に滅亡の悲運に遭遇し日沒する事なしと世界に誇りたる大英國も獨逸の爲めに敗戰を重ねて今や本土を護るに死力を盡しつゝある衰れむべき狀態たるを見れば如何に深く心を打たるゝものがあるのである。

東洋に於ては聖戰已に四ケ年に渡り皇軍の奮戰努力の結果支那には新政府確立せられ平和の曙光暗雲を衝きて輝き初めしが蔣政權は尚ほ滅亡に到らず壞滅に瀕せる重慶を守りて英米の援助によりて餘喘を保ちつゝあり。

本事變を顧るに當初は北支事變より起りて支那事變となり更に其目的は暴支膺懲にありしものが遂に東亞の新秩序建設となり遂に世界歴史に珍らしき大戰爭と化し我國肇國以來の大戰爭となつたのである。此の如くして我國は正に一大轉換期に際會するに到つたのである。

此重大時局を克服し大東亞共榮圏を建設し永遠平和を確立するには内に新体制を樹立して強大なる國防國家の体制を完備しなければならぬのである。現下の如き深烈なる國際情勢に於ては國防完備せざる國家は忽ちにして滅亡に到る事は歐洲に於ける狀態が眼前に吾々に示す所である。此意味に於て近衛首相の所謂高度國防國家の建設は絶体必要にして現下に於ける最大の急務である。而して是れが建設には政治、經濟、文化等各部門に於て過去を去りて此新しき目標に向ひて一致協力する事が最も重要なる事柄である。

此新体制を確立する爲めに起されたのが大政翼賛運動である。此大政翼賛運動の綱領とする處は大要次の樣である。

一、肇國の精神に基き大東亞の新秩序を建設し進んで世界の新秩序を確立せんことを期す

一、國体の本義を顯揚し庶政を一新し國家の總力を發揮し以て國防國家体制を期す

一、萬民各々其職分に奉公し協心戮力以て大政翼賛の臣道を全うせんことを期す

未曾有の非常時局にある我國は此運動によりて指導され一億一心大御心を奉戴して新体制確立の爲めに全力を盡さん事を期せなければならないのである。舊体を脱して新体に移つるのであるからそこに多少の犧牲も出で多少の窮屈もあるのであるが、我國の盛衰の決する重大時局であり大東亞の共榮圏を指導する立場に立ち進みて世界の新秩序を確立し永遠の平和を建設すると謂ふ偉業を爲し遂げるであるから是等の艱苦困難は默々として忍ばなければならぬのである。

吾々國民は常に此大業建設の爲めに戰線に奮鬪せらるゝ皇軍將士の勞苦に對し心より感謝を捧げると同時にあらゆる部面を國防と結びつけて日々の職場に於て力を盡すこそ最も大切の事と感ずるのである。

明治天皇の御製に

一ほと〳〵に心をつくす國民の
　力そやかてわか力なる

と仰せられてある。誠にありがたき極みである。一億國民が此御心に添ひ奉る事が高度國防國家を建設する事になるのである。

年頭に當りて吾々は此心を以て本年の歩を進めんと期するものである。

表題圖案解說

石倉新十郎

紀元二千六百年を劃期とし、國を擧げて新體制が唱へられると共に、我が蠶絲業界も必然的に舊套を離れ、數十年來の生絲輸出依存觀念から脱脚し、方面を轉換して再生の途を拓かなければならない事となつた。須らく吾人は玆に舊來の秕指針に醒め曲庇を排し、熟慮前途の正道を見極めすべきである。未だ其見透しがつかぬ者は焦燥懊惱眞に慘憺たるが如くであるが自然的事實は其れと何等沒交渉に向はなければならぬ所に向はしめなければ止まぬのである。そして祖先傳來の我が八紘一宇の理想は蠶絲業をも包含して東亞の天地に今將に實現されやうとして居るのである。

三十年來我が千曲會員が活動し、我が蠶絲業界に到る所刻み來れる功績は實に赫々たるものがあるが、將來の活動は遠く大陸に延びなければならず、事實大東亞の蠶絲業は今正に黎明期に入つて居るのである。そしてレーヨン、ナイロン、ビニヨン等人工繊維の伸展とは全々別個に蠶絲業の生成發展があり、世界蠶絲業は懸つて大東亞の任に歸するであらう。其任務はまた我が千曲會員の双肩に架せられて居ると云ふべきである。

圖の斜線を以つて劃し縱列線を施せるは大陸を表し、八紘一宇の理想よりする我が千曲會の聖光が東方より燦然として大東亞に明彩を投じつゝあるを表顯したのである。

合成纖維と石炭

大平敏彦

ナイロンが昭和十三年に始めて世に現れるや纖維界の關心は等しく此れに集中し、其の正体の檢索が種々なる角度から行はれたのである。此の絹に似た新纖維が出現と同時に石炭と空氣と水とから出來るのだとの宣傳には一種の壓迫感をさへ感じたものも少くはなかつたであらう。

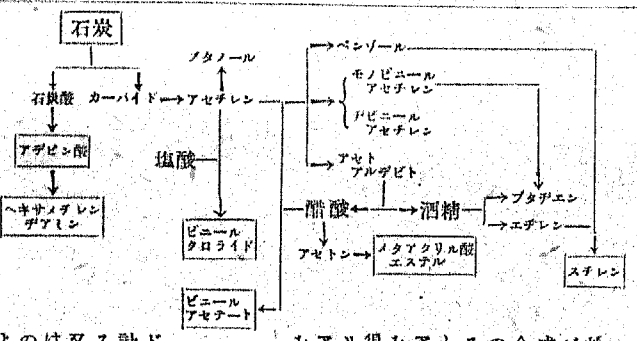
然し我が維威ある多くの學者の熱心な研究の結果其の秘密は次ぎ次ぎと曝かれ、今日では其の成分は基より製法に至るまで略々明かにされ、且つ此の短時日の間に新しい合成纖維の出現をさへ見るに至つた。

ナイロンの成分がアデピン酸とヘキサメチレンヂアミンである事は京都帝大の櫻田教授、小田教授、東洋レーヨンの星野氏等によつて夫々最近別個に證明された處で、此れ等の物質が石炭の乾溜によつて得られる石炭酸から誘導体である事も周知の事實となつた。又此れ等物質の製造に要する水素は水の電解によりアンモニアは空中窒素の固定によつて得られるのであるから、ナイロンが石炭、空氣水から出來る事に就ては最早疑の餘地はなくなつたわけである。

石炭が燃料となるの他、乾溜によつて石炭酸、キシロール、トルオール、ナフタリン、アンスラセン等種々有用なる物質が得られる事は早くから知られ、その應用に就てもペークライト、染料等多くの重要なものがあるが尚ほカーバイトとしての用途にも極めて重要なものが多々あるのである。カーバイドは石炭と石灰とを電氣爐中で高熱する時に得られる物質で、水の添加によればアセチレン瓦斯を生じ、窒素氣中で强熱すればアンモニアの製造や肥料に供せられる石灰窒素になる。アセチレンは分子構造極めて簡單にして、且つ三重結合を有する爲め化合力に富み、從つて種々なる合成藥品のオリジナルマスターをなしてゐる。即ちアセチレンは酸素アセチレン焔として鐵板の熔接、切斷等に用ひられるの他、アルデヒド、酢酸、アルコール、アセトン等を始めとして合成樹脂、合成ゴム等の重要な物質が製造せられ、今日の時局に於いて一時もゆるがせにずる事の出來ない物質である。此くの如くアセチレンは近代の化學に於て既に花形たるの地位を保持するものであるが、今ナイロンの登場するに及び更に合成纖維への一役が增加する事となつた。これはナイロンの登場に伴ひ夫れに對抗して現れた種々の合成纖維が殆ど總てアセチレンから導き得る高重合体なる合成樹脂によつて占められてゐるからである。P.C.纖維、ビニヨン、カネビヤン　合成一號、ポリスチレンポリメタアクリル酸エステル等々何れもアセチレンに出發せざるはないのである。從つて只今の處合成纖維は總て石炭から出來ると云ふ事になる。

ポリスチレンが鹽化メチレンとイソプロピルベンゾールとの混液からヘプタン槽中に紡絲する時纖維を形成する事は昭和十三年にスタウディンゲル氏より報導された處で此の纖維は溫度〇・七二%軟化溫度一〇五度で被服用には尚ほ研究を要するものであるが、水化學藥品等に對する抵抗力が非常に强く、電氣絶緣性もあるので化學用濾布、高壓用電纜電氣材料用絲其の他工業的の用途に供され、尚ほ重合体が强酸强アルカリ等に强く且つ透明に美しい爲め可塑物として藥品瓶、電氣器具或は裝飾品、有機硝子等としての用途も工夫されてゐる。ポリスチレンはスチレンから容易に合成し得られるが、此のスチレンは大阪工業試驗から最近ベンゾールとエチレンより好收量を以て合成される方法が發明された、此れに要するベンゾールとエチレンとは夫々別表の如くアセチレンから誘導されるのである。

アセチレンは又適當なる觸媒の存在の下に鹽酸又は醋酸と作用せしめる時は夫々ビニールクローライド、ビニールアセテートを生成する。此の際用ひられる醋酸も亦アセチレンからアセトアルデハイドを經て生成されてゐる。此のビニールクローライドはP.C.纖維の基なるポリビニールクーライドの重合体である。ポリビニールクーライドは三重結合を有する爲め化合力に富み、從つて種々なる合成藥品のオリジナルマスターをなしてゐる。即ちアセチレンは酸素アセチレン焔として鐵板の熔接、切斷等に用ひられるのには適しないが水、酸、アルカリ等に强い爲め種々なる工業上の用途がある。又漁具などにも適當で、ビニヨン製の網による魚獲をフロリダに於て試驗した處從來の網による收獲の二倍が得られたと云ふ。此れ等重合体は何れもポリスチロールに類似の性質を持つてゐる爲め用途の上にも非常によく似たものがある。最近獨乙I.G.社からP.C.纖維と同系の合成纖維としてパールランと稱するものが發表されたと云ふが、此の纖維は軟化點も二〇〇度以上であり、沸騰湯中に於ても安定であると云はれてゐる。



我が國に於ける合成纖維ビヤン、合成一號等も今や實用化の途上にあるが、何れもビニールアセテートを鹼化してビニールアセチレンを得られるポリビニールアルコールを用ひて造られた纖維である。カネビヤンは日產一千ポンドの工場の計畫中であると聞く。又合成一號は京都帝大の季博士によつて發明された纖維であるが、最近の發表によればポリビニールアルコールから造つた纖維を一度二〇〇度位まで加熱した後アルデハイド處理を行ふ事により軟化點二〇〇以上の而も沸騰湯中に浸すも變化しないものになし得たと云ふ又これはスフ、絹以上の强伸度を有じ、染色もナフトール染料によれば自由に出來ると云はれる。今日までに發表された合成纖維としては非常に優秀なものと思惟されるが、最善を期しての研究が尚ほ續けられてゐる模樣である。

ポリメタアクリル酸エステルも既に有機硝子としての用途を持つてゐるが、目下纖維としての研究も行はれてゐる。此の材料としては用ひられるメタアクリル酸も酒精も別表の如くアセチレンから誘導される。

以上記述し來つた處により合成樹脂纖維がカーバイドと如何に密接な關係にあるかと云ふ事は容易に理解出來ると思ふが、ナイロンと雖も其の構成因子たる酸及ヂアミンの化學構造から考察するならば、やはり此れ等の因子がアセチレンの誘導体たるモノビニールアセチレン、ヂビニールアセチレン或はブタヂエン等から導き得るであらうと云ふ事も考へられる。若し之れが容易に出來るとするならナイロンも石炭タールを待たずしてカーバイドから製造し得る事になる。

天然纖維がアミノ酸や葡萄糖を組成因子としてゐる事から動植物性蛋白質や澱粉等を資料として各分子が鎖狀に連結した高重合体を合成するなら何も羊毛や綿花を待たずとも立派な纖維が得られるに相違ないが、此れは非常に六ケ敷い仕事なのである。若し酵素の力を借りるならとも思はれるが、夫等の合成酵素たるセルロイズシンテアーゼとか、プロテインシンテアーゼ等と云はれる樣な酵素の發見や抽出は又容易ならざる問題なのである。元より此の如き方面の研究は遠き將來の爲の學術的研究とすべきで、今此の物資補充の急に處する爲の合成纖維としてはアセチレン誘導体に依存するのが至當であると思はれる。

今日我が國に於けるカーバイトの需要はその生產高から見て相當多量であると推察される。即ち其の生產高に於て我が國は世界第二位に位してゐる。獨乙は六〇萬瓲で第一位、伊太利は二〇萬瓲で第三位である。我が同盟國が何れもカーバイド工業に於て世界の主位にある事は甚だ面白い事實である。今後合成纖維の爲めにも之れが供給を必要とするならば、カーバイドの生產は益々增加する事になる。然し北支、滿洲等の資源開發も着々行はれつゝある現狀であるから石炭資源に關しても將來の不安は殆ど無いと豫想する事が出來る。

上田蠶絲專門學校

報國團結成（校友會改組）

今や多事多難の世界大動亂の巷に立ち、而も雄然として大東亞建設に邁進する我が帝國の重大なる負荷の大任を思ふ時、此處に敢然と叫ばれた新体制の前には、舊套を脱せざる總てのものは無力である。此の時局を認識しこの偉業遂行に喜んで馳せ參ぜんとする國民は亦此の新体制の傘下に總てを捧げて參集したのである。全國民が各自の業務を通じてその誠を盡さんと誓ふ時、この大業を受け繼いで產業戰線に報國の誠を捧げんとする若き學徒を養成する本校も亦當然兩手を上げてこの新体制と行動を共にし、世紀の大業の完遂の一助ともならん事を誓ふのである。新体制下に於ける本校學生の學と行と相俟つて國家に奉仕せんとするの信念と覺悟とは、「青少年學徒に賜りたる勅語」を奉戴し、又「進んで難局に當り身を挺して事に從ふ」の本校モットーを体して、愈よ鞏固となり、もとより職員も情勢の變轉を認識し、教育の刷新、校風の振興を企圖し來たのであるが、玆に文部省の唱導せる報國團を結成し、舊來の論據を脱却して新らしき理念に進み學生と混然一体となり教道實踐の積極性を具現せんとする体制が整へられたのである。

十一月五日職員側主なる準備委員と學生側各級代表者の第一回報國團結成準備會が開かれて後二十六日校友會解体、二十七日報國團結成を見るに至る迄で、校長以下各關係者の準備はこの精神と意義とを如何樣に表現せしむべきか、又徹底せしむべきか、又全教職員、學生の打つて一丸たらしめるには如何にすべきか、等種々討議されたのであつた。斯くて吾が上田蠶絲專門學校報國團の結成式は十一月二十七日講堂に於て嚴肅に行はれたのである。

尚報國團規則、及役員陣容は左の如くである。

報國團結成式式辭

今ヤ世界ハ大動亂ノ中ニ在リテ戰鬪ハ洋ノ東西ヲ問ハズ各處ニ於テ行ハレツヽアリ。我國ハ日支事變勃發以來已ニ三年有半大義ヲ世界ニ宣布シ正シキ平和確立ヲ目指シ大東亞新秩序建設ノ爲メニ邁進シツヽアリ。此一大事業ヲ遂行スル爲メニハ一億一心上下一体トナリ國內体制ヲ完備シ國体ノ本義ニ徹シテ不動ノ信念ト不屈ノ意志トヲ以テ全國民が各自ノ業ヲ通ジテ奉公ノ誠ヲ盡スコトニ精進シナケレバ不可能デアル。實ニ我國ノ前途ハ內外多事多端ニシテ我々教育ノ任ニ當ルモノハ其ノ責任ノ重大ナルヲ自覺シテ教育ノ刷新振興ニ努メ時局ノ現實ヲ認識把握スルト共ニ進ンデ我國將來ノ負荷ニ任ズベキ人材ヲ育成スル爲ニ力ヲ竭サナケレバナラズ又學生諸子ハ自ラ進ミテ國家將來ノ重責ヲ負フテ立ツベキ重要ナル人物ニナラン爲ニ努力シナケレバナラヌ

是レハ實ニ國本ニ培ヒ國運ヲ隆盛ナラシメ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ル所以ノモノデアツテ我國教學ノ本義ヲ實現スルコトニ外ナラヌノデアル。學生諸子ハ皇國青年學徒トシテ學ニヨリ行ニヨリ國家ニ奉仕スルノ信念ト覺悟トヲ鞏固ナラシムルコト今日ヨリ急ナルハ無イノデアル。

我々ハ此重大ナル目的ヲ達成センが爲メニ三十年ノ歷史アル我が上田蠶絲專門學校校々會ヲ解組シ本日玆ニ新ニ上田蠶絲專門學校報國團ヲ結成シタノデアル。是レハ實ニ從來ノ校友會ニテハ達成セラレザル一大使命ヲ遂行センが爲メデアル。我校ノ教職員及生徒ハ報國團ノ結成ニヨリ打ツテ一丸トナリテ自我功利ノ思想ヲ排除シ報國精神ニ一貫セル校風ヲ樹立シナケレバナラヌノデアル。學生諸子ハ能ク此意ヲ体シ報國團ノ團員トシテ團ノ目的達成ノ爲メニ奮勵努力セラレンコトヲ庶フ次第デアル。

昭和十五年十一月二十七日

井上柳梧

石川金太郎編（最新刊）

日本蠶絲學文献集

四六判洋裝函入・六號橫組一〇〇〇頁・定價六円八十錢　送料三十三錢

本書は一六七六年から一九三七年に至る我が國蠶絲學關係の諸々の文獻を剩すところなく蒐集載錄したもので「桑」「蠶」「製絲」「蠶絲化學」「書籍」に部類をわけ、無慮二萬に及ぶ文獻の著者名、研究題目、發表年、發表刊行物の名稱、その號數等を記載し、懇切な索引と相俟つて一目瞭然と編輯したもので過去四世紀に跨るわが國蠶絲學の全貌を鳥瞰するに足ると共に、斯界の研究に無限の光明を點する唯一の資料として特筆すべき勞作である。著者による先の文獻目錄は絕版既に久しく、斯界の翹望切なるに對へて爾來本書の完成に心血を注がれたもので、その努力と功は本書の上に高く評價されずにをかれないであらう。切に大方の御淸鑑を待つ。

增補改訂 第四十一版

蠶絲業法 並 關係法規

新刊發賣

三六判洋布六號 二段組三三〇頁

定價一圓　送料九錢

（內容）一蠶絲業法　二原蠶種管理法規　三產繭處理統制法規　四蠶絲業組合法規　五製絲業法規　六輸出生絲取引法規　七絲價安定施設關係法規　八蠶絲業改良獎勵助成補助規則　九蠶絲試驗場規則　一〇生絲檢查所法規　（附錄）公文書用文字例　メートル度量衡表　寒暖計華氏攝氏溫度對照表

遠藤保太郎著　**栽桑學通論**　定價三・八〇　〒三三

鈴木三郎著　**乾燥論**　定價六・〇〇　〒三三

明石弘著　**近代蠶絲業發達史**　定價五・五〇　〒三三

中澤辨次郎著　**蠶絲經濟概論**　定價四・三〇　〒三三

今村省三著　**世界纖維界と蠶絲**　定價三・二〇　〒二一

上田蠶絲專門學校同窓會編　**蠶絲科學講演集**　定價三・八〇　〒三三

同　**同 第二輯**　定價二・五〇　〒二一

同　**同 第三輯**　定價三・〇〇　〒二一

東京市神田區錦町一
振替東京一三一九〇

明文堂

（出版目錄一本誌讀者に贈呈）

報國團規則

（昭和十五年十一月十三日）

第一章　名稱及目的

第一條　本團ハ上田蠶絲專門學校報國團ト稱ス

第二條　本團ハ教學ノ本旨ニ則リ報國ノ精神ヲ以テ全校一致心身ノ修錬ヲ行ヒ校風ノ發揚ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二章　組織

第三條　本團ハ本校職員及生徒ヲ以テ組織ス

第四條　本團ニ左ノ五部ヲ置ク

一、總務部
二、鍛錬部
三、國防部
四、文化部
五、生活部

第五條　總務部ハ企畫、指導、經理ニ當リ且ツ他ノ部ニ屬セザル事務ヲ掌ル

鍛錬部ニ勤勞、劍道、柔道、弓道、野球、庭球、卓球、蹴球、競技、スキー山岳、スケート、女子運動ノ十二班ヲ置ク

國防部ニ防空、射擊、銃劍道、國防競技、滑空ノ五班ヲ置ク

文化部ニ學藝、修道、音樂、映畫、講演、編纂ノ六班ヲ置ク

生活部ニ風紀、衛生、購買、輔導ノ四班ヲ置ク

第三章　役員及係

第六條　本團ニ左ノ役員及係ヲ置ク

團長　一名
副團長　一名
部長　五名
理事　若干名
班長　若干名
幹事　若干名
係　若干名

第七條　團長ハ學校長之ニ當ル

副團長以下役員ハ團長之ヲ任免ス

副團長、部長、理事、班長、係ハ職員ヲ以テ之ニ充テ、幹事ハ生徒ヲ以テ之ニ充ツ

副團長ハ總務部長ヲ兼ヌルコトヲ得

第八條　役員及係ノ任務左ノ如シ

團長ハ本團ヲ總理ス

副團長ハ團長ヲ輔佐シ團長事故アルトキハ事務ヲ代理ス

部長ハ團長ノ指揮ヲ受ケ其ノ部ヲ統括シ部務ヲ掌理ス

理事ハ部ニ所屬シ部長ヲ輔佐シ部務ニ參畫ス

班長ハ部長ヲ輔佐シ班務ヲ掌ル

係ハ總務部又ハ班ニ屬シ部長又ハ班長ヲ輔佐ス

幹事ハ總務部又ハ班ニ屬シ部長又ハ班長ノ指揮ヲ受ケ事務ニ從事ス

第九條　役員ノ任期ハ一箇年トシ毎年三月任免ス、但シ再任ヲ妨ケス

第四章　會議

第十條　職員タル役員ヲ以テ役員會ヲ組織ス

役員會ハ毎年四月及ヒ必要ノ場合ハ臨時團長之ヲ招集シ其ノ諮問ニ應シ規則ノ改廢、豫算、決算其他團長ニ於テ重要ト認ムル事項ヲ審議ス

第五章　會計

第十一條　本團ノ經費ハ團費、基本金利子、其ノ他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨ス

第十二條　團員ノ團費左ノ如シ

一、生徒團員ハ入團ノ際入團金トシテ金五圓ヲ納入スルモノトス
但シ製絲教婦養成科生徒ハ金壹圓ヲ納入ス

二、生徒團員ハ團費トシテ第一學期、第二學期ハ各金參圓、第三學期ハ金貳圓五拾錢ヲ各學期始ニ納入スルモノトス
但シ製絲教婦養成科生徒ハ毎學期始ニ金壹圓ヲ納入ス

三、職員團員ハ團費トシテ毎月月俸ノ千分ノ五ヲ負擔スルモノトス

第十三條　本團ノ會計年度ハ毎年四月ニ始マリ翌年三月ニ終ル

第十四條　本團ニ基本金ヲ置ク基本金ハ入團金ノ一部及寄附金ヲ以テ積立ツルモノトス

附則

第十五條　本則施行上ノ細則ハ團長之ヲ定ム

報國團役員及係

團長　井上柳梧
副團長　大瀧照太郎
總務部理事　部長　佐藤利一
遠藤保太郎、原田親雄、佐藤春太郎
古谷榮藏、蒲生俊興、林貞三、倉澤美德、奥正已、野口新太郎、高木千枝、阿形輝司、和田仙太郎、石倉新十郎、窪田潤、山口定次郎、小松忠一郎、小林清丸、依田啓藏、和田主計、田玉龜太郎、内藤榮吉、志田敏夫、小林敏、大平正三

係

北村俊一、外他の部に屬せざる職員

鍛錬部　部長　岡德治郎

勤勞班長小山和夫、劍道班長原田親雄、同係小林藤助、柔道班長湯原諄、弓道班長小川朋治郎、野球班長大平敏彦、庭球班長山崎晋録、卓球班長窪田潤、蹴球班長町田博、競技班長小林尚一、スキー山岳班長細川豊、同係今井輝雄、スケート班長小松忠一郎、女子運動班長志田敏夫

國防部　部長　高木千枝

理事　宮下丈夫、小山和夫

防空班長志賀章雄、同係宮本英雄、射擊班長滿澤儁、同係白倉一男、銃劍術班長細川豊、同係今井輝雄、國防競技班長須田圭二、同係小林藤助、滑空班長湯原諄、同係阿久澤孝典

文化部　部長　蒲生俊興

理事　小林尚一、都筑貞吉

學藝部長羽島不二夫、同係宮原太正治、唐澤正、瀧澤昌一、富永暐、修道班長山口定次郎、同係小林敏、大平正三、神林至、音樂班長柳澤延房、同係三宅太、白倉一男、映畫班長荻原清治、同係小泉恭平、金井正一、講演班長小泉所、同係阿久澤孝典、鞭政共、編纂班長春原良太郎、同係市村尚文、前島正直、倉澤恒夫、國島正

生活部　部長　行元自忍

理事　倉澤美德（蠶三學級主任）、山口定次郎（蠶二同）、佐藤春太郎（蠶一同）、大瀧照太郎（絲三同）、窪田潤（絲二同）、林貞三（絲一同）、野口新太郎（紡三同）、小松忠一郎（紡二同）、小林清丸（紡一同）、奥正已（化一同）、志田敏夫（教婦養成科生徒主任）

風紀班長志賀章雄、同係町田博、市村尚文

衛生班長森健二、同係小林藤助、購買班長宮原大正治、輔導班長羽島不二夫、同係大平正三

幹事（生徒役員）

總務部　各級總代

鍛錬部　新設以外の班は校友會當時の各部役員、新設班は未定

國防部　未定

文化部　新設以外の班は從來の關係部委員

生活部　風紀、輔導班は各級總代及各寮幹部外は未定

報國團員所屬班及志望班調

（昭和十五年十二月七日現在）

第一種（所屬指定班、日常運動し得る班）

所屬	第一	第二	計
劍道班	九一	四五	一三六
柔道班	九一	六一	一五七
弓道班	一三	八一	二一二
野球班	四二	四一	八三
庭球班	四五	六一	一一六
卓球班	三三	八四	一一七
蹴球班	七一	九五	一六二
競技班	三一	一一	四二
スキー山岳班	五一	二一	七三
スケート班	四八	一一	五九
射擊班	四四	一一	五五
銃劍術班	四八	一一	五九
國防競技班	四四	一一	五五
計	一三七	一五八	二九五

第二種（志望）

滑空班	一一	二一	三一
修道班	一三	一一	二四
音樂班	一二	一一	二三
講演班	一六	一一	二七
女子運動班（教婦養成科生徒全部）	四六	一一	五七

母校便り

秋季演奏會　恒例の音樂部秋季演奏會は十月十日午後六時より講堂で開かれ、非常な盛會であつた。曲目は次の如し。

ハーモニカ合奏
校友會々歌、キングカール、航空日本の歌、廣瀬の射手、ルムバタムバルムバ、興亞行進曲
マンドリン、ギター合奏
ドナウ河の漣、人の氣も知らないで、ダムール、オーバアザウエアズ、夢のタンゴ、ザブシーの月
アコーデオン獨奏
想ひ出夜曲、涙の青空、雨に咲く花
ハーモニカ獨奏
ホエム、追憶の雨
箏、尺八合奏
千鳥の曲、秋の調
尺八は特に山口助教授の出演であつた。

學術談話會　十月十一日並に十一月一日の放課後千曲會館階上に於て今學年第十一、十二回の學術談話會が開かれた。談話者及演題は次の如し。

十月十一日
時局と蠶絲業の再編所　小泉　所
十一月一日
桑園肥料自給對策に就て　町田　博
大豆の利用と用途　細川　豊

校内辯論大會　辯論部では十月十二日（土曜日）午後一時より秋季辯論大會を講堂に於て開催、午後四時盛會裡に終了した。辯士及演題は次の如し。

一、開會之辭
一、新體制と學生　絲一　福島　君
一、世界轉覆の大陰謀を發く　紡二　尾崎　吉俊君
一、戰爭と經濟　蠶三　水口　米雄君
一、新體制下に於ける蠶絲業を論ず　蠶二　本多　孝君
一、校友會諸君に告ぐ　化一　信和君
一、自然と人生　絲二　由内　武志君
一、太平洋を論ず　紡三　小林　淺井弁右門君
一、閉會之辭　本多　孝君

小川喜一少將講演　十月十四日午前中二時間大日本青年黨顧問である小川喜一少將の『新體制の眞髓に就て』と言ふ講演があつた。同氏は前日市公會堂での講演の爲に來られたのを阿形講師の紹介で來校されたもので、學生は滅來にない感銘を受けた樣子であつた。

母校創立三十周年記念辯論大會　母校辯論部では皇紀二千六百年と母校創立三十周年を記念すべく始めての試みとして近畿の高農校よりも辯士を招き十月十七日午後七時より市商工會議所樓上に於て盛大な辯論大會を開いた。參加校は岐阜高農、三重高農の二校であつたが聽衆は會場に溢れる程の盛會振りであつた。演題、辯士は次の如くである。

一、開會の辭　本多　孝君
一、戰爭と經濟　本校　水口　米雄君
一、戰時下食糧問題に就て　岐阜高農　朴　成宇君
一、時局下に於ける蠶絲業を論ず　本校　本多　孝君
一、滿洲問題に就て　三重高農　寺田　由永君
一、猶太民族を語る　本校　尾崎　吉俊君
一、本校辯論部長挨拶
一、閉會の辭　安達使三郎君。

平安神宮遙拜式　十月十九日官幣大社平安神宮に孝明天皇奉祀に際し母校では午前九時講堂に於て遙拜式を行ひ校長から訓話があつた。

第二十五回校庭運動大會　恒例の陸上大運動會は運動日和に相應はしい十月二十日擧行された。何でも新體制の呼ばれる時で、相當以前から其の内容に就て反省や新しい趣向がこらされてゐたが結局は其れも霧消して少しの飛躍も見なかつた、然し選手の顏には眞劍な熱意が、應援團歌に亦拍手には若人の生氣が溢れ、悅びと樂しみの中に本年の運動會を終了した。對科競技では往昔劉をなしてゐた養蠶科は遂き結局紡織科が優勝した。成績は次の如くで陣容整はぬ織化科は充分な氣を吐いた。

科目	織化	紡織	製絲	養蠶
對科競技種目				
100米	4	5	4	8
200米	2	9	5	5
400米	5	5	6	5
800米	0	11	8	2
1500米	3	6	10	2
距離走	0	13	7	1
長繼跳	3	7	5	1
800米高跳	1	5	10	5
走巾跳	4	9	6	2
走棒高跳	6	3	11	1
3段跳	5	9	6	1
槍投	0	9	4	8
砲投	5	9	7	0
丸投	1	4	11	5
板投	39	104	100	46
計				

學生體力檢定　昨年より法規に依り實施された體力檢定は井上校長を會長とし、志賀生徒主事補を委員長とする母校體力章檢定會に依つて十月廿七、八、卅日の三日間に亘り職員より十名の檢定委員を擧げて全學生に就て實施された。檢定標準は初級、中級、上級、級外の四段に分れ、百米、二千米、走幅跳、手榴彈投、運搬、懸垂屈臂の六種目に就て指定年齡の中は毎年行はれるもので本年度受驗人員は三〇九名にして合格者は二一二名（六八・六%）であつた。

體育デーの健脚步行　十一月三日の明治節體育デーには午前九時奉安殿前にて拜賀式を行つた後職員生徒一同次のコースで一日健脚步行をなした。

校門—米山城趾—砥石城趾—傍陽村曲尾—長村横尾—信綱寺參詣　長村眞田—山家神社參拜—長谷寺參詣—眞田驛より電車驛校米山城趾に於ては井上校長より其城趾の關係する戰史に就て一時間の講話があつた。

近江神宮遙拜式　官幣大社近江神宮が御創建せられ天智天皇奉祀さるに當り十一月七日母校に於ては午前十時遙拜式をなし校長より講話があつた。

行元教授「日本道德學」を著す　母校生徒主事行元自忍教授は此の程「日本道德學」（二七〇頁）を上梓、嚴松堂より定價二圓五〇錢で發行された。大方の御購讀を推める次第である。其の内容は次の如くである。

緒論人間。第一章風土。以下歷史。家、家族制度。國、國體。國民性。神道。武士道。支那文明と日本道德。印度文明と日本道德。歐洲文明と日本道德の十章。結論日本の使命。

第二回文化講義　本年度の第二回文化講義は十一月十五日午後一時より二時間に亘る元商工大臣海軍中將伍堂卓雄氏の『國防國家に就て』であつた。

皇紀二千六百年奉祝會參列者　十一月十、十一の兩日宮場前廣場に於て催された皇紀二千六百年奉祝會に參列の光榮に浴した井上校長以下九氏は左の如くであつた。

井上柳梧、阿形輝司、和田仙太郎、遠藤保太郎、佐藤利一、原田親雄、岡德治郎、古谷榮藏、郡築貞吉

尙この外に奉祝歌齊唱團へ本校を代表して柳澤延房教授、學生宮田章君、吉田登喜夫君が參加した。

二千六百米繼走競技　十一月十、十一日に亘つて放課後競技部主催で皇紀二千六百年奉祝のクラス對抗二千六百米繼走競技が行はれた。各級選手は十三人（一人二百米）で接戰の結果織維化學科一年が優勝、絹紡織科二年が二等、製絲科二年が三等であつた。

小川、松田兩氏入營　今春卒業後養蠶科の副手を勤めてゐた小川泰弘、松田眞二の兩氏は豫てから入營を待期してゐたが松田氏は十一月十日、小川氏は十四日夫々職員生徒の歡送を受けて元氣よく當地を發つた。

教練査閲　十一月二十日母校配屬將校高木千枝大佐並に教師小山和夫少尉指導にかゝる學校教練の査閲が行はれた。査閲官は第十四師團司令部附植野少將で、午前八時半校庭に全生徒集合、配屬將校の狀況報告に始まり、全學年閲兵、整列、着裝檢査を行つた後、各學年別に主として各個教練、中隊密集教練、

狭窄射撃、戦闘各個教練、小隊戦闘教練、中隊戦闘教練（校外）等を行ひ、尚全學年に學科諮問、書類檢査があつて終了、講評があつて優良と認められた。

御親閲舞受記念聯合演習　十一月二十一、二日に亘つて善光寺平に於て行はれた鈴木知事統監の御親閲拜受記念北信男子中等學校聯合演習に母校も三年生編成部隊にて參加、よく日常訓練の成果を擧げ絶大なる好評を博した、演習は廿一日午後二時屋代に集合、赤軍藍軍に分れ清野村にて往古の川中島合戦を彷彿せしむる遭遇戦を展開、續いて夜間演習に入り、翌日は午前八時中津村國道にて閲兵、分列、昭和小學校庭にて終了式を行ひ、午後二時元氣旺盛にて歸校した。尚母校配屬將校は同演習の指導委員長を勤め、第十四師團長上野勘一郎中將閣下が視察に來られた。

ツベルクリン反應檢査　十一月廿五日、學生の中體力法に依る該當者一六三名に對し森校醫に依つてツベルクリン注射を行つたが陰性を現はした者は二名であつた。

產業報國精神特別講義　十一月廿九日午後一時半より約二時間に亘り文部省實業學務局長關口勵氏の產業報國精神に關する特別講義があつた。演題は「產業報國精神に就て」であつて多大なる感銘を受けた。

學級主任設置　教育の新體制に因り報國團の結成と相待つて學級主任を設け從來より一層職員生徒の緊密と訓育教化の徹底を圖ることとなつた。因つて十二月十二日付母校々務分掌規程第二章教育の條項末尾へ左の一條が加へられた。

第八條　前二條ノ目的達成ノ爲メ各學級ニ學級主任ヲ置キ教官中ヨリ校長之ヲ命ス其ノ任期ハ一ケ年トス

尚今期學級主任は次の如し。

一學年　二學年　三學年

養蠶科　佐藤春教授　山口助教授　倉澤教授

製絲科　林　教授　窪田助教授　大瀧教授

紡織科　小林清講師　小松助教授　野口教授

織化科　奥　教授

皇紀二千六百年 母校創立卅周年 記念祭

記念式

菊花香る秋酣の十月二十六日、皇紀二千六百年と共に創立三十周年を迎えた母校の記念式典は來賓並に同窓會員多數參列の下に厳粛に行はれた。式は國歌奉唱、紀元二千六百年奉祝歌合唱、宮城遙拜、出征將士武運長久祈願默禱の後、二千六百年紀元節に御下賜の詔書奉讀、校長式辭、針塚名譽教授祝辭、校歌合唱で盛會裡に終了した。

物故職員卒業生傭人追悼會

記念式後講堂に祭壇を設け創立以來の物故職員、卒業生、學生、傭人の追悼をなした。別所安樂寺住職の讀經、校長の弔詞、燒香、千曲會、學生、遺族の各代表燒香をなして終了、後校内戦歿者供養塔を禮拜した。

記念講演會

翌二十七日は市公會堂樓上に於て午前九時より午後五時に亘り現下業界のポイントを捉へた演題の下に夫々第一人者を招じて記念講演會が開かれた。聽衆はさしもの會場を埋めて眞劍に耳を傾けてゐた。演題並に講師は次の如し。

一、時局下に於ける蠶絲對策　農林省蠶絲局長　吉田清二氏

一、合成繊維の發達の經路　大阪帝大理學部教授　大阪帝大繊維化學研究所長　理博　吳祐吉氏

一、蠶の品種に就て　片倉蠶業試驗所長　農博　小針喜三郎氏

一、新體制と經濟　ダイヤモンド社長　石山賢吉氏

皇紀二千六百年並に上田蠶絲專門學校創立三十周年記念講演會講演集出づ

新刊

蠶絲科學講演集　第四輯

菊版約一五〇頁　定價壹圓（送料共）

——內容——

時局下に於ける蠶絲對策　農林省蠶絲局長　吉田清二氏

合成繊維の發達の經路　大阪帝大理學部教授　全繊維科學研究所長　理學博士　吳祐吉氏

蠶の品種に就て　片倉蠶業試驗所長　農學博士　小針喜三郎氏

新體制と經濟　ダイヤモンド社長　石山賢吉氏

申込所　長野縣上田市　日本蠶絲科學研究會　振替長野六四一三番

東京市豐島區西巢鴨二ノ九〇三　玉研社　振替東京一二〇〇七番

第二回出征會員慰問資金募集

日支事變も已に三ケ年の長きに及び、此の間吾が會員からも多數の勇士を戰場に送りました。吾が同窓勇士の趨く所往くとして赫々たる武勳を樹てざるは無く其の功績は本紙上に依つて屢々報導せられた所であります。今もなほ支那邊境一帶に亘つて散在し、或は抗日支那軍と戰ひ、或ひは寒暑、病魔と闘ひ、一身を挺して血みどろな苦闘を續けて居られます。吾々銃後にある會員は、此の選ばれたる少數の戰士に向つて、常住座臥感謝の念を捧げると同時に慰問をなすべき義務を有すると信じます。又聖戰の最初に於ける當時と今日とで慰問の程度に厚薄があつてはならないと存じます。此の意味に於て本會に於ては已に第一回の慰問資金を募集しましたが、此の趣旨が徹底せずに應募金額が少なかつた事は時局柄甚だ遺憾のことゝ存じます。今回は第二回目を募集し、出征會員の意氣を鼓舞し併せて感謝の意を表せんと存じます。何卒本會の趣旨御諒承の上奮て御厚金の程願上げます。

一、〆切　一月末日

一、金額　隨意

上田蠶絲專門學校同窓會銃後會

社團法人千曲會第一回總會

——千曲會第十四回代議員會——

總會次第

例年十一月廿三日開催されてゐた本會代議員會は去る八月廿三日社團法人として認可されたので第一回總會と改められ、母校並に本會合同にて皇紀二千六百年、母校創立三十周年記念祭を擧行するを機會に之を早めて十月廿六日開催された。同日記念式並に創立以來の母校關係者及卒業生物故者の追悼祭を行つた後午後一時より千曲會館階上に集合着席し宮城遙拜をなして開會となつた。出席會員は十五支會の六二名、在校會員二六名であつた。

開會之辭

先づ蒲生理事長開會の挨拶と共に本會の發展と事業の一部とに就て述べ、次いで井上名譽會長の挨拶、倉澤理事の會務報告があり、後議長選擧が理事長指名となり、高畠秀男氏が議長、猪坂直一氏が副議長に就き議事に入つた。

本日社團法人千曲會第一回總會を開催するに當り、遠近に拘らず代議員並に會員各位には御繁務中御出席下され誠に感謝に耐えません。本會は八月五日付農林省より社團法人の認可があり同月廿三日登記が濟んだのであつて、其の定款に依ると十一月に開くことになつてゐますが本年は開校三十周年記念祭を行ふ機會があつたので本日開催することにしたのであります。

偖本會々員は一九五二名にして、內譯養蠶七七二名、製絲七四一名、紡織二八一名、教婦養成科一五一名となつてゐます。會員中の應召者は現在〇〇〇名で、不幸にして戰死された者は昨年代議員會以降上田實、久芳大三齋藤修一、齋藤利雄、西谷剛一の五氏があり十七氏を出した誠に痛惜の情に耐えません。

本會中の滿支產業調査會の事業としては、野口理事、猪坂直一氏が支那、滿洲を視察されるに當り僅少の資金を出して調査を願ひ、尙林理事が米國より歸朝され、同氏に新しき研究と米國經濟情勢の御報告を願つた。

本回は各支會からの提案は少いが母校發展策に關する問題、新役員選任等重要なる問題がありますから充分に檢討御協議願ひます。

名譽會長挨拶

吾校は年と共に發展し今年纖維化學科も開設され校舍も明春完成の豫定であつて各位と共に喜ぶと共に御後援を謝し今後一層の聲援を御願ひします。蠶絲業も未曾有の難關時に際會し各位の一層の努力を願ひ、此の方面に於ても學校の將來に就て御援助を御願ひします。

會務報告

一、昨年學生が時局及興亞の大精神を理解する樣時々講演會をなし又職員の出張を多くすることを校長に申告する事を決議されたのであるが、母校ではよく之を認め井上校長、野口教授、奥教授等が夫々期を異にして滿支視察に行かれ夫々報告があり、又猪坂氏からも同樣の視察報告があつた。又時折名士を招いて時局的講演會をなし、興亞研究の「直昆會」も創設され又大日本青年團學生隊に加入の學生も多數あり時局認識教化は進められ、近く滿洲の湯川秀夫氏を講師に願ひ夫々其の主旨徹底に努力してゐる。

二、母校創立三十周年記念事業として昨年決議された講演會は明日開催の運びとなつた

社團法人千曲會の誕生とその使命

千曲會理事長　蒲生俊興

吾が千曲會は會員相互の親睦を厚うし併せて本邦蠶絲業並に纖維工業の改良發達を圖るを目的として去る八月五日附を以て農林省より社團法人組織の認可指令を受領し、同時に八月二十三日上田區裁判所に於て無事その登記を相濟ませ、玆に芽出度社團法人千曲會が正式に誕生した次第である。

會員一九一〇名を擁する吾が千曲會は多年の宿願が叶つて愈々法の認むる一人格と權能とを賦與せられ、玆に堂々たる公益法人としてその强固なる基礎の上に立つて益々一致團結し、所期の目的達成に邁進せねばならぬ次第である。

時恰かも輝やかしい皇紀二千六百年に際會し、又聖戰第四年の時難克服途上に當つて、期せずして本會が玆に組織體制を更め、全く面目を一新するに至つたことは本會にとつては寔に不朽の一大記念事たると共に、その使命の愈々重且つ大なるものあるを惟はざるを得ない。

抑も本會は大正三年母校第一回卒業生の翌年以來、上田蠶絲專門學校同窓會として呱々の聲をあげてより玆に二十有七星霜を閱し、爾來年を逐うてその會員數を增加し、今や實に養蠶科七七二名、製絲科七四一名、紡織科二八八名、教婦養成科一〇九名、總計一九一〇名の隆盛を見るに至り、各會員は夫々本邦蠶絲業はもとより紡織及び人絹業の各官衙學校及び會社等の諸相に奉職し、各その持場に於て職域奉公の誠を盡して居るのである。

曩に本會は定款に基き第一回總會を開催し本會役員の改選を行つて新進の士を拔擢し、尙最近理事會に於ては本會事務の分掌を協議して新體制を樹立し、庶務、經理、文化、會報、企畫、人事及情報の各部を設け、恰かも蠶絲業の一大轉換期に際し、本會の負へる責務の完遂に愈々邁進せんとする次第である。

尙從來本會が刊行し來つた千曲時報は上司の命によりて千曲會報と改題し、そのタイプを改めて本新年號より發刊することゝなり、本會々員相互の連絡機關として愈能率を發揮したい考である。會員諸兄に於ても幸ひに之を諒とせられ益々本會のため御助勢賜はらんことを冀つてやまない次第である。

終に臨み、本會の社團法人認可申請に對して特に多大の努力を拂はれた高畠秀男氏、久保書記並びに前理事者各位に對し深甚なる感謝の意を表する次第である。（昭十五・十二）

千曲會電報略符改正

本會々員間並に母校との間に利用しつゝある電報略符（會員名簿卷末のもの）は往年創案の儘にて、種々不備のもの或は缺けたるもの等あり少からず不便を感じてゐましたので、今回全く改正補塡し近く發行される名簿に載せ今後の御使用に供したいと思ひます。從つて新名簿配布後は必ず新らしき略符たる事を御忘れない樣特に御注意願ひます。

昭和十五年十二月二十日

千曲會庶務係

千曲會名簿に就て

吾が千曲會員名簿は例年十一月に發行してゐたのでありますが本年は種々の事情にて一月末頃となります故不惡御了承願ひます。

就ては勤務先、住所移動或は召集解除等になられ未だ當係に御屆けならない方は大至急御通知願ひます。尙一般に「住所不屆」の方が多く何かと不便に付是非共御知らせ願ひます。

昭和十五年十二月二十日

會員名簿係

議事

今回の提出問題は次の如く十四件で、内支會からの提出議案は僅かに五案であつて、第十三、十四の兩案は當日緊急動議として出されたものであつた。以下各議案と決議事項を記す。

一、本會入會金を在校中に積立せしむる件（神奈川）

【說明】本會入會金は額多くして卒業の際何かと出費の多い新入會員として之を一時に完納は困難であるから其便法として在學中に何かの方法を以つて積立てゝ置き卒業と同時に本會に支拂つたら本會としても好都合である。

【決議】理事者より學校學生課或は校友會等へ交渉協議を願ひ且つ他の專門學校の例も調査願ふこと。

二、會費の一時金納入方法改正に關する件（安筑）

【說明】現在の一時金納入方法の外に更に其の中途に於ても各會費の納入年數に應じて合理的納入金額を算定する方法を規定されたい。

【決議】一ヶ年間理事者の研究に任せ、明年度總會に附議すること。

三、母校更展策に關する件（岐阜）（兵庫支會の案も包含す）

四、會員活動に關する件（東京）

三、四の兩件は出席支會長及代議員より說明さるべき筋合のものに就き此所に省略す

五、昭和十四年度本會收支決算認定の件

異議なし

六、昭和十六年度本會收支豫算議定の件

歳出の部の研究費と云ふ項目中で東京支會へ支出の資金が認められ、外に異議なし。

七、役員選任の件

【說明】社團法人千曲會定款に從ひ、理事拾五名、監事五名、評議員參拾名の役員を選任願ひたし。

昭和十四年度千曲會收支決算表

收入

一金四千九百八拾圓也　收入豫算高
一金四千九百六拾六圓七拾七錢　收入決算高

支出

一金四千九百八拾圓也　支出豫算高
一金四千七百六拾圓五拾錢　支出決算高
收支差引金貳百六圓貳拾七錢
右總會ノ認定ニ附ス　昭和十五年度ヘ繰越ス

昭和十五年十月二十六日　千曲會理事長　鼎生俊興

收入

科目		決算額	種目	本年度決算額	本年度豫算額	增減	附記
一會費	一通常會費	二、七四五、八〇	一通常會費	二、七四五、八〇	三、〇四〇、〇〇	△二九四、二〇	△豫算ニ對シ二百五十二圓減シタルハ定額納入者拂キニヨル
	二終身會費	二、四四七、〇〇	二終身會費利子	二、四四七、〇〇	二、七〇〇、〇〇	△二五三、〇〇	
		三五〇、〇〇		三五〇、〇〇	三五〇、〇〇		
	三準會員會費	四八、八〇	一準會員會費	四八、八〇	九〇、〇〇	△四一、二〇	△豫算ニ對シ金四十一圓二十錢減シタルハ徵收年度ヲ更改シタルニ依ル
二基本金	一基本金利子	九〇〇、〇〇	一利子繰入	九〇〇、〇〇	九〇〇、〇〇		
三雜收入	一蠶絲學雜誌益金	九五、七〇	一蠶絲學雜誌益金	九五、七〇	六〇、〇〇	△三五、七〇	
	二印稅	—	一印稅	—	一〇、〇〇	△一〇、〇〇	
	三廣告料	七四、五〇	一廣告料	七四、五〇	四三五、〇〇	△三九、五〇	
	四雜收入	一八五、二〇	一預金利子 二雜收	一八五、二〇	一七〇、〇〇	△一〇、二〇	
四寄附金	一寄附金	四二、四〇	一特定寄附金	四二、四〇	八〇、〇〇	△三七、六〇	
		三八、八〇	二一般寄附金	三八、八〇	三〇、〇〇	△八、八〇	
五繰越金					三〇〇、〇〇		

【決議】平澤勝氏外九名の選衡委員に依り別記の通り選任す。

八、繰越會費募集に關する件

【說明】第一回應募金額は一〇九三圓で支出金額は一七四〇圓で、赤字となつてゐる故第二回募集をなす必要がある。尙募集を各支會へ御願ひしたいが如何。

【決議】本會より各會員へ振替用紙を入れて第二回募集の主旨を通知し醵金を願ふこと。本會より各支會長へ第一回募集狀況を通知すること。各支會長よりも各支會員宛勸誘狀を出すこと。

九、繭絲學雜誌に關する件

【說明】紙の拂底、騰貴及購讀者の局部的であること等の爲に經營困難であるが、本會員學術機關雜誌として是非繼續したいから會費(會員購讀料)を一圓增額して三圓としたい。

【決議】異議なし。

十、資產管理に關する件

一部字句の訂正があつて次の如く可決。

資產管理規程

第一條　基本財產ハ左ノ物件又ハ方法ニ依リ理事長之ヲ管理ス

一、土地及建物

二、有價證券(公債、社債、株式)

三、郵便貯金

四、金錢又ハ公、社債信託

五、銀行預金

第二條　金錢信託ハ三菱信託株式會社、公社債信託ハ安田信託株式會社トシ預金ハ株式會社安田銀行及株式會社八十二銀行トス

第三條　歲計現金ノ保管ハ振替郵便貯金又ハ前條ノ指定銀行トス

第四條　第一條第一號並ニ第二號中株式投資ニ付テハ其ノ都度理事會ノ議決ヲ經、監事ノ承認ヲ經ルヲ要ス

附則

本規程ハ社團法人千曲會定款施行ノ日ヨリ

收入合計	四、九六六、七七
一繰越金	三八、八七

支出

款	科目	決算額	種目	本年度決算額	本年度豫算額	增減	附記
一基本金繰入高	一基本金繰入高	四、九九、四〇	一基本金繰入高	四、九九、四〇	五〇〇、〇〇	△	
						△	一、九八、七四	豫算ニ對シ金五十圓六十錢減シタルハ會費納入者減キニヨル
二事務所費	一俸給	一、一九九、七四	一專任幹事給	一、一九九、七四	一、〇〇一、〇〇	△	一〇、八四	豫算ニ對シ金二十九圓十六錢增シタルハ增俸シタルニヨル
			二書記給	三九、一六	五〇、〇〇	△	一〇、〇〇	豫算ニ對シ金五十八圓增シタルハ退職者ニ臨時支給シタル結果ニヨル
	二雜給	九一、〇〇	一傭人手當	九一、〇〇	一〇〇、〇〇	△	八、〇〇	豫算ニ對シ金六十圓增シタルハ來客多キニヨル
			二賞與	七、〇〇	一〇、〇〇	△	五、〇〇	
三旅費		一〇〇、〇〇	一旅費	一〇〇、〇〇	一二〇、〇〇	△	二〇、〇〇	豫算ニ對シ金九十五圓八十七錢增シタルハ金庫買入レタルニヨル
四交際費		一八五、〇〇	一役員交際費	一八五、〇〇	二〇〇、〇〇	△	一四、九七	
五需用費		二六六、七七	一備品費	二六六、七七	三〇〇、〇〇	△	三三、二三	
			二消耗品費	一六、〇三	三〇、〇〇	△	一三、九七	
			三通信費	二六、一九	六〇、〇〇	△	三三、八一	
			四雜費	七八、六九	八〇、〇〇	△	一、三一	
六集金費		二〇七、八一	一會費集金料	二〇七、八一	一二〇、〇〇	△	一二、一九	
			二未納會費整理費	一三、八一	一〇〇、〇〇	△	八、一九	
三會議費								
一代議員會費		三六一、六二	一代議員旅費補助費	三六一、六二	三八〇、〇〇	△	一八、三八	豫算ニ對シ金十九圓五十錢增シタルハ雜品ノ買入多キニヨル
		二七、二六	二雜費	二七、二六	一〇〇、〇〇	△	七二、七四	
二役員會費		七四、三五	一役員旅費	七四、三五	一二〇、〇〇	△	四五、六五	
			二雜費	二五、〇〇	六〇、〇〇	△	三五、〇〇	
四事業費								
一會報費		二、一三五、五一	一印刷費	二、一三五、五一	二、一〇〇、〇〇		三五、五一
		一、三九、九八		一、三九、九八	一、二四八、〇〇		八八、九八
			二編輯費	九七、六〇	九五四、〇〇		三、六〇
			三送料費	一八六、〇〇	一四〇、〇〇	△	四六、〇〇
			四雜費	一〇四、五〇	一二〇、〇〇	△	一五、五〇
二名簿費		六三、三三	一印刷費	六三、三三	三二、〇〇	△	三一、三三
			二編輯費	四七、〇〇	四六、〇〇	△	元、八八
			三送料費	四七、三三	三〇、〇〇	△	一六、三三
			四雜費	一〇、〇〇	一〇、〇〇		〇、〇〇

豫算ニ對シ金二十二圓六十錢增シタルハ物價騰貴ニヨル

豫算ニ對シ金四十圓增シタルハ編輯手當ヲ增額シタルニヨル

豫算ニ對シ金二十九圓八十八錢增シタルハ物品ノ買入多キニヨル

豫算ニ對シ金百六十三圓五十三錢增シタルハ部數ヲ增加シタル結果ナリ

之ヲ施行ス

十一、代議員旅費支給に關する件

【說明】本會總會に出席したる代議員には當分の中現住地最寄驛より開會地驛迄の乘車賃往復三等實費を支給する、但し豫算の都合に依り增減する。

【決議】之を規程として定款に附加する事を考慮する。

十二、賛助員、顧問推薦の件

【說明】社團法人千曲會は從來通り本校教授、助教授、講師(何れも會員外)を賛助員として、且又針塚先生を同樣本會顧問として推薦したい。

【決議】異議なし。

十三、社團法人設立功勞者表彰の件(仮島正風氏動議)

【說明】社團法人設立に當つて其書類作製其他に特に功績ある事務員久保藤一氏を表彰したい。

【決議】異議なし。其方法を理事者に一任す。

十四、千曲會記念日設定の件(勝又藤夫氏動議)

【說明】同窓會に限らず他の諸種の會が記念日と言ふ樣な何か有意義な日を有つてゐるものであるが當千曲會にも何かその樣な日を設定して其の日に各支會の總會とか懇親會とか海遊會と言ふ樣な事をやることにしたい。

【決議】開校記念日である四月十七日を千曲會記念日とす。

第一回本會總會に於て當選せる社團法人千曲會役員左の如し(五十音順)

理事長　滿生　俊興

理事　荻原　清治　倉澤　美德

昭和十六年度社團法人千曲會收支豫算書

收入　豫算說明(△印ハ減)

科目	豫算額	種目	本年度豫算額	前年度豫算額	增減	附記
財産ヨリ生スル收入						
一基本財産收入	一、一〇〇、〇〇	一預金利子	一、一〇〇、〇〇	一、一〇〇、〇〇		
二繰越金	一八五、〇〇		一八五、〇〇	一六六、〇〇		一九、〇〇

支出合計

三蠶絲學雜誌費	四〇、〇〇	一蠶絲學雜誌費	四〇、〇〇	四〇、〇〇	△	〇、〇〇
四講演講習費		二雜費			△	一〇、〇〇
五奬勵費	五〇、〇〇	一講師費			△	三、〇〇
六共濟費	三〇、〇〇	二雜費	五〇、〇〇	五〇、〇〇	△	五、〇〇
七調査費		一研究費	五〇、〇〇	一〇〇、〇〇	△	五〇、〇〇
五補助金	一五〇、〇〇	二各部會費	三〇、〇〇	一〇〇、〇〇	△	一〇、〇〇
一補助金	四三、三四	一共濟費	三〇、〇〇	八〇、〇〇	△	七〇、〇〇
六交付金	四三、三四	二弔慰金		四〇、〇〇	△	三〇、〇〇
一交付金	四三、三四	一調査費		一〇、〇〇	△	一〇、〇〇
七豫備金		一補助金	一五〇、〇〇	一五〇、〇〇		
一豫備金		一豫備金	四三、三四	四五、〇〇	△	二、六六
一交付金	四三、三四	一交付金	四三、三四	四五、〇〇	△	二、六六
支出合計	四、七六〇、五〇		四、七六〇、五〇	四、九六〇、〇〇	△	二〇〇、〇〇
						三九、五〇

收入

一金五千五百五拾六圓也　豫算高

支出　豫算高

一金五千五百五拾六圓也

收支差引皆當

昭和十五年十月二十六日

社團法人千曲會理事長　滿生　俊興

久保田正樹　蒲田潤
小宮山太助　小松忠一郎
須田圭二　中澤忠
永田平　野口新太郎
林貞三　細川三郎
松村季美　山口定次郎

監事
阿久澤孝典　飯島正胤
笠原正巳　高木三治
森本爲之助

評議員
有賀文雄　味澤泰造
石坂虎治郎　猪坂直一
飯島貞雄　沖濤治
岡部彌平　加藤好男
勝又藤夫　金崎眞英
河西尚一　岸勝彌
小林茂樹　小林良亘
齋藤菊雄　櫻井隆夫
芝荒雄　鹽原克巳
鈴木敎吾　田口敏夫
二宮九二二　野崎清
原田兵衛　松野正一
森田三郎　山本辰五郎
八木誠政　安井健一
吉田榮治　和田晋

社團法人千曲會第一回總會出席者氏名

福島支會　北澤周一(代)　小川茂(代)
群馬支會　岡部彌平(評)　石坂虎次郎(代)
東京支會　大木定雄　上野榮仁(代)　味澤泰造
八木誠政(評)　高畠秀男(副會長)
宮澤勇(代)　三谷勝
小林巡美(代)　原田兵衛(評)
神奈川支會　高木三治(監)　宮入誠一(代)
齋藤菊雄(理)
茨城支會　前澤康雄
越佐支會　平澤勝(代)　二宮九二二(評)
上村賢造

歳入合計　五、五五六、〇〇

科目	豫算額	前年度繰越金	一八五、〇〇
三雜收入		一廣告料	四一、〇〇
		二印稅	一、〇〇
		三雜收入	三〇、〇〇
四入會金		一入會金	三〇〇、〇〇
		二雜收	一現金預金利子
五會費		一會費	三、三五〇、〇〇
六寄附金		一寄附金	四〇、〇〇

歳出

豫算　豫算說明（△印ハ減）

科目	豫算額	種目	本年度豫算額	前年度豫算額	增減	附記
一會議費		一前年度繰越金	一八五、〇〇	一六六、〇〇	△	一九、〇〇	前年度剩餘金
一總會費	四一五、〇〇	一代議員旅費	四一五、〇〇	四一五、〇〇			代議員旅費三十人分一人金七圓六十五錢宛
二〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇	二需用費	二〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇			此金二百二十九圓五十錢
一役員會費	二五、〇〇	一役員旅費	一五、〇〇	七、〇〇			印刷費金十五圓、備品費金十圓、消耗品費
		二需用費	一〇、〇〇	一五、〇〇			金二十圓、其他雜費金二十五圓
二事務所費							
一給料	一、三五、〇〇	一幹事給料	一、三五、〇〇	一、三五、〇〇			役員旅費十人分一人金六圓宛此金六十圓
	四四、〇〇	二書記給料	四四、〇〇	三五、〇〇			印刷費金十圓、備品費金十圓、消耗品費金
二雜給	五九、〇〇	一旅費	三五、〇〇	一、六七四、〇〇	△	一、六三九、〇〇	十五圓、其他雜費金二十圓
		二傭人料	一五、〇〇	一、〇〇			幹事一名年額金三十圓
		三役員交際費	三四、〇〇	三五、〇〇			書記一人月給金二十二圓十二ヶ月分此金二
		四賞與	三五、〇〇	三八四、〇〇	△	三三〇、〇〇	百六十四圓、事務囑託一人年額金百二十圓
三需用費	四〇〇、〇〇	一備品費	四〇〇、〇〇	一六五、〇〇	△	三三五、〇〇	役員職員出張十人分一人金十五圓宛
			四〇〇、〇〇	四〇〇、〇〇			傭人十七人分一人金二圓宛
			五〇、〇〇	五〇、〇〇			役員交際費
							官報代金十四圓、職員錄二部代金八圓、圖
							書代金二十圓、其他雜品代金八圓

科目	豫算額	種目	本年度豫算額	前年度豫算額	增減	附記
		二會報購讀者一人金六十錢宛二百五十人分此金百五十圓、名簿一部代金三十錢宛百部代金三十圓、不要品賣却代金二十圓	三〇〇、〇〇	一五〇、〇〇		九五、〇〇	會報購讀者一人金六十錢宛二百五十人分此
		三廣告料	一五〇、〇〇	六〇〇、〇〇	△	四五〇、〇〇	金百五十圓、名簿一部代金三十錢宛百部代
		一廣告料	一五〇、〇〇	七六、〇〇	△	七四、〇〇	金三十圓、不要品賣却代金二十圓
		二印稅	一、〇〇	一、〇〇			印稅收入金
四入會金		一入會金	三〇〇、〇〇	一五〇、〇〇		一五〇、〇〇	入會金納入者一人金二十圓宛百五十人分
五會費		一會費	三、三五〇、〇〇	三、八四六、〇〇		四五六、〇〇	會費一時金納入者一金五十圓宛四人分此金
		一正會員會費	三、三五〇、〇〇	三、七五六、〇〇	△	四五六、〇〇	二百圓、正會員一人金四圓宛七百七十五人
		二準會員會費	六〇、〇〇	九〇、〇〇	△	四〇、〇〇	分此金三千百圓準會員一人金八拾錢宛百十三人分
六寄附金		一指定寄附金	四〇、〇〇	八〇、〇〇	△	四〇、〇〇	基本財産蓄積金指定寄附金五圓、其他指定
		二一般寄附金	三〇、〇〇	三〇、〇〇			寄附金十五圓
						一〇、〇〇	一般寄附金
			五、五五六、〇〇	六、〇六六、〇〇	△	五一、〇〇	

北陸支會　山田保士
北信支會　高橋善吾　中澤勝也
原田種龜　森本爲之助
金崎眞英　勝又藤夫
井澤喜三　北島正生
飯島正胤（幹）　小宮山太助（評）
中澤忠（理）　細川三郎
山崎壽　市原文雄
原清志　西澤重光
永田平　猪坂直一
永井眞吉　笠原正巳（監）
佐藤東平　浦山藤吉
茅野功
安筑支會　野尻白二　中島茂司（代）
山田弁一（代）　塚田庸男
諏訪支會　石川健丸（代）　鹽原克巳（評）
金野巖保
龍川支會　小林茂樹（支會長）　新野元治郎
靜岡支會　岸勝彌（評）　鈴木正一郎
大箸政平
東海支會　瀧澤幸　比田井政治
近畿支會　山本奈良三郎（代）　櫻井隆夫（評）
兵庫支會　山越茂（代）

理事　蒲生俊興　倉澤美德
林貞三　中澤忠
齋藤菊雄　野口新太郎
監事　飯島正胤　笠原正巳
高木三治
評議員　岡部彌平　小宮山太助
鹽原克巳　二宮九二二
櫻井隆夫　原田兵衛
岸勝彌　八木誠政
參事　須田圭二　小松忠一郎
山口定次郎　窪田潤
荻原清治
在校會員　町田博　山崎晋鎌
小川泰弘　瀧澤昌一
松田眞二　小泉泰平
大平正三　瀧澤佐俊
鞭政井　小林尙一
市村尙文　唐澤正
細川豊　倉澤恆夫
國島正　富永暐
瀧川春夫

款	項	金額	目	豫算額	決算額	比較	備考
			二 消耗品費	三〇、〇〇	三〇、〇〇	—	用紙三千枚代金十五圓、封筒五千枚代金十圓、其他雜品代金五圓
			三 會費集金費	二三〇、〇〇	二三〇、〇〇	—	集金委託料金七十五圓、郵便切手代金四十圓、端書代金二十六圓、拂込料金二十三圓、拂出料金八圓、用紙代金八圓、未納會費整理費金四十五圓
			四 通信運搬費	六〇、〇〇	六〇、〇〇	—	通話料金十五圓、普通郵便料金四十圓、物品運搬代金五圓
			五 雜費	八〇、〇〇	八〇、〇〇	—	新入會員歡迎會費金三十圓、帝國發明協會費金十圓、其他雜費金四十圓
三 事業費		一、六二六、〇〇		一、六二六、〇〇	二、六七一、〇〇	△一、〇四五、〇〇	
	一 會報費	一、一九八、〇〇		一、一九八、〇〇	一、四九一、〇〇	△二九三、〇〇	
			一 印刷費	八四三、〇〇	一、〇九〇、〇〇	△二四七、〇〇	一部代金三錢四厘四毛宛一ヶ月二千四百五十部印刷代金八十四圓二十八錢十ヶ月分
			二 編輯費	二五、〇〇	二五〇、〇〇	△二二五、〇〇	專任編輯者一人月手當金十圓宛十ヶ月分金百圓、委員三人年手當金十五圓宛一ヶ年分金四十五圓、發送費一ヶ年分金三十圓
			三 送料	一〇四、〇〇	一一九、〇〇	△一五、〇〇	一部五厘宛一ヶ月二千八十部送料金十圓四十錢十ヶ月分
			四 需用費	三六、〇〇	三二、〇〇	四、〇〇	原稿用紙代金十三圓、帶封代金二十圓、通信費三圓
	二 會員名簿費	二七三、〇〇		二七三、〇〇	七二〇、〇〇	△四四七、〇〇	
			一 印刷費	一四五、〇〇	五四六、〇〇	—	會員異動調一部代金六錢三厘宛二千三百部代
			二 編輯費	四〇、〇〇	四〇、〇〇	—	委員四人年手當金二十圓、其他雜支出金二十圓
			三 送料	六三、〇〇	一一四、〇〇	—	一部金三錢宛二千百部代
			四 需用費	二五、〇〇	二〇、〇〇	—	諸用紙代金二十圓、其他雜費金五圓
	三 講演講習費	五、〇〇		五、〇〇	一〇〇、〇〇	△九五、〇〇	
			一 講師費	三、〇〇	八〇、〇〇	△七七、〇〇	講師費
			二 需用費	二、〇〇	二〇、〇〇	△一八、〇〇	消耗品代
	四 調査費	二〇、〇〇		二〇、〇〇	七〇、〇〇	△五〇、〇〇	
			一 調査費	二〇、〇〇	二〇、〇〇	—	調査諸費
			△一 研究費	—	五〇、〇〇	△五〇、〇〇	
	五 共濟費	一二〇、〇〇		一二〇、〇〇	一二〇、〇〇	—	
			一 共濟費	一二〇、〇〇	一二〇、〇〇	—	共濟費金八十圓、弔慰金四十圓
四 基本財産造成費		五〇五、〇〇		五〇五、〇〇	三〇〇、〇〇	二〇五、〇〇	
	一 基本財産造成費	五〇五、〇〇		五〇五、〇〇	三〇〇、〇〇	二〇五、〇〇	
			一 蓄積金	五〇五、〇〇	三〇〇、〇〇	二〇五、〇〇	入會金三百圓、一時金會費二百圓、指定寄附金五圓
五 交付金		五二七、〇〇		五二七、〇〇	五七八、〇〇	△五一、〇〇	
	一 會費納入交付金	五二七、〇〇		五二七、〇〇	五七八、〇〇	△五一、〇〇	
			一 會費納入交付金	五二七、〇〇	五七八、〇〇	△五一、〇〇	一人金六十八錢宛七百七十五人分
六 補助金		七五〇、〇〇		七五〇、〇〇	一五〇、〇〇	六〇〇、〇〇	
	一 補助金	七五〇、〇〇		七五〇、〇〇	一五〇、〇〇	—	
			一 研究費補助	五五〇、〇〇	—	五五〇、〇〇	各種研究會補助金
			二 蠶絲學雜誌費補助	二〇〇、〇〇	—	二〇〇、〇〇	蠶絲雜誌發行費補助金
			△ 校友會補助	—	一五〇、〇〇	△一五〇、〇〇	
七 豫備費		三六〇、〇〇		三六〇、〇〇	三八〇、〇〇	△二〇、〇〇	
	一 豫備費	三六〇、〇〇		三六〇、〇〇	三八〇、〇〇	△二〇、〇〇	
			一 豫備費	三六〇、〇〇	三八〇、〇〇	△二〇、〇〇	豫算外若クハ豫算超過ノ費途ニ充ツ
歳出合計		五、五五六、〇〇		五、五五六、〇〇	六、〇六八、〇〇	△五一二、〇〇	

本會記事

本會日誌

十月十七日　群馬千曲會總會開催せらる、林理事出席せり。
十月十九日　西谷剛一氏名譽の戦死を遂げらる、電報にて弔意を表す。
十月二十四日　菅澤隆三氏逝去せらる、電報にて弔意を表す。
十月二十六日　第一回本會總會開會す。
十月二十七日　記念講演會開催す。
十月三十一日　千曲時報廢刊屆提出す。
十一月二日　約束郵便承認申請書提出す。
十一月十四日　土屋安治氏(絲二十二)逝去せらる、電報にて弔意を表す。
十一月十六日　北本重郎氏(絲八)逝去せらる電報にて弔意を表す。
十一月二十日　故齋藤利雄氏の公葬執行せらる、母校及本會を代表し町田講師會葬す。
十一月二十二日　新津温泉に於て越佐千曲會總會開催せらる、林理事出席す。
十一月三十日　故西谷剛一氏の英靈故山へ無言の凱旋せらる、電報にて敬弔の意を表す
十二月二日　社團法人千曲會役員改選の登記申請す。

支會役員改選

十一月十七日諏訪千曲會に於て役員改選の結果左の通り更迭せり。

支會長　石川　健丸氏
副支會長　島倉　督造氏
同　手塚　政吾氏
代議員　山岸　寅雄氏

向上資金醵出

本會向上資金中へ左の通り醵出せられました、洵に感謝に堪へません。本紙上を以て受領證に替へ御禮を申述べます。

金拾圓也　小松　茂久氏
金拾五圓也　高橋　利光氏
金五圓也　清水　洸氏
(以上本會取扱)

銃後資金應募者

(頭書ニ1トアルハ第一回醵出者
2トアルハ第二回〃
3トアルハ第三回〃)

3金拾圓也　岡部　彌平
1金拾圓也　渡邊　齊
1金參圓也　清水　洸
2金貳圓也　高畠　秀男
3金貳圓也　小宮山太助
1金貳圓也　有賀　彰夫
2金壹圓五拾錢也　中山　泉
右合計金參拾圓五拾錢也
累計金九百五拾圓五拾錢也

會費領收(十一月二日現在)

昭和十五年度會費金四圓也

久保田正樹(蠶三)　田附由次郎(蠶五)
松本　一二(蠶六)　白川　孝昌(蠶九)
竹内　博雄(蠶九)　有賀　彰夫(蠶三)
中島　眞(蠶三)　松田　眞二(蠶三)
一志　藏人(絲一)　伊藤　競(絲一)
田中　一男(絲一)　田中　三郎(絲一)
松井　清三(絲一)　森　淳太郎(絲一)
竹内眞喜雄(絲二)　山本　薫(絲二)
上野　榮仁(絲三)　神保　喜久(絲三)
小坂田　亮(絲四)　橋本　景吉(絲四)
大久保福三郎(絲六)　石塚浪之助(絲七)
栗原　安定(絲七)　高橋　安雄(絲七)
西　孝重(絲八)　島倉　督造(絲九)
本山　正美(絲九)　石濱　正巳(絲一〇)
井原　邦雄(絲一〇)　川船　卓爾(絲一〇)
蒲生　勇一(絲一〇)　倉橋　琢而(絲一〇)
小山　雅夫(絲一〇)　清水　重雄(絲一〇)
新庄哲二郎(絲一〇)　竹内　健二(絲一〇)
林　直助(絲一〇)　山岸　寅雄(絲一〇)
依田寛之助(絲一〇)　青木　友彌(絲一〇)
石井　謙三(絲一〇)　小山　清(絲一〇)
合田　信一(絲一〇)　牧野　弘(絲一〇)
柳澤　忠次(絲一〇)　山本奈良三郎(絲一〇)
梅澤治三郎(絲一〇)　笠原　重龜(絲一〇)
金野　晨保(絲一〇)　神戸　敏夫(絲一〇)
猿渡　兼光(絲一〇)　田口　榮治(絲一〇)
多勢　龜次(絲一〇)　若井　弘(絲一〇)
内山　鶴雄(絲一〇)　畠山茂太(絲一〇)
村田　僧宜(絲一〇)　山田　弁一(絲一〇)
關　嘉四郎(絲一四)　渡邊　康平(絲一四)
荻原　國雄(絲一五)　五島小太郎(絲一五)
佐藤　孟(絲一五)　三谷　勝(絲一五)
宮城　長雄(絲一五)　神津治郎兵衛(絲一六)
田尻　恒治(絲一六)　永井　俊郎(絲一六)
長谷川洋治(絲一六)　三木　辰男(絲一六)
和田　益巳(絲一六)　磯部　英一(絲一七)
太田　良信(絲一七)　丹倉　二郎(絲一七)
金子新一郎(絲一七)　小林　清志(絲一七)
佐藤　東平(絲一七)　高須　正高(絲一七)
高橋　滿(絲一七)　中村　守太(絲一七)
松田　僚(絲一七)　安田　辰巳(絲一七)
柳澤　榮一(絲一七)　湯淺　文雄(絲一七)
荒木　愼藏(絲一八)　鈴木　保男(絲一八)
松井　憲二(絲一八)　成尾喜八郎(絲一八)
宮坂　榮(絲一八)　宮島　靜三(絲一八)
山田　保士(絲一八)　小關　悅郎(絲一九)
四方　藤雄(絲一九)　瀧澤　芳樹(絲一九)
山村　洋介(絲一三)　杉木　政義(紡一)
西村　武男(紡四)　宮下　丈夫(紡四)
垣内　源一(紡五)　中尾　七郎(紡五)
橋本　和夫(紡六)　市村　何文(紡七)
竹内　方榮(紡九)　近藤　清一(紡一)
齋藤猪之作(紡二)　淺治裂裝男(紡三)
百瀬　文雄(紡四)　下世古廣志(紡六)
宮坂　科晃(紡一八)　小幡　昇(紡一九)
東海林誠治(紡一九)

未納會費納入者

金拾圓也
(昭和三年度後期分、昭和四年度前期分)
小松忠一郎(紡三)

昭和十五年度會費金四圓也(十月吾現在)

岩本　市郎(蠶一)　奥田　達雄(蠶一)
佐谷戸健次郎(蠶一)　高須　兵司(蠶一)
藤　勝四郎(蠶一)　木山　勝雄(蠶一)
本間　直人(蠶一)　丸山俊一郎(蠶一)
磯野　良知(蠶二)　小川　保(蠶二)
小林　國造(蠶二)　戸倉惣兵衛(蠶二)
朝長　勝治(蠶二)　濱井　壽夫(蠶二)
加藤喜一郎(蠶三)　齋藤　格次(蠶三)
塚田　桂春(蠶三)　鑑一(蠶三)
平澤　勝(蠶三)　中山　誠彦(蠶三)
五島眞喜太(蠶四)　吉川　博輔(蠶四)
高橋義三郎(蠶四)　田口　二宮九二二(蠶四)
松岡　道也(蠶四)　浦山　藤吉(蠶五)
尾見　祐八(蠶五)　宇都宮休一(蠶六)
大井　學(蠶六)　小山　二郎(蠶六)
佐藤　俊三(蠶六)　野本治衛(蠶六)
村田　勻(蠶六)　横山康一郎(蠶六)
小野　修二(蠶七)　福富　繁(蠶七)
味知　康三(蠶七)　岩瀬　義夫(蠶八)
緒方善之助(蠶八)　桑田　庄七(蠶八)
坂田　正贇(蠶八)　根岸丑之助(蠶八)
日野　光平(蠶八)　細川　護(蠶八)
田口富五郎(蠶九)　宇田虎一郎(蠶一〇)
小澤周一郎(蠶一〇)　門田秀太郎(蠶一〇)
小中　潔(蠶一〇)　深谷　正一(蠶一〇)
向井　致彌(蠶一〇)　山本三六郎(蠶一〇)
桂　應祥(蠶一〇)　市川　清(蠶一〇)
大谷内三衛(蠶一一)　谷川　海造(蠶一一)
若林　茂一(蠶一一)　安部　和(蠶一一)
今村　良郷(蠶一一)　大熊　康代(蠶一一)
齋藤　孝道(蠶一一)　武本　治(蠶一一)
寺島　雅彥(蠶一一)　野口　浩也(蠶一一)
三輪　貞德(蠶一一)　矢島　良雄(蠶一一)
吉田　隆雄(蠶一一)　永井　勝未(蠶一四)
阿部　丈夫(蠶一五)　阿部茂一郎(蠶一五)
櫻井　弘吉(蠶一五)　笹本　保雄(蠶一五)
平野　秀男(蠶一五)　池田三之助(蠶一六)
内苑　駿吉(蠶一六)　大澤　寅市(蠶一六)
北澤　孝一(蠶一六)　向坂　朋二(蠶一六)
坂田　武(蠶一六)　中澤　二郎(蠶一六)
中村　馨(蠶一六)　深迫　明(蠶一六)
宮本　清松(蠶一六)　山本　傳市(蠶一六)
飯塚　安治(蠶一七)　石田　馨(蠶一七)
出穂　稔(蠶一七)　伊藤　力三(蠶一七)
北原　喜昌(蠶一七)　金峰　義松(蠶一七)
小林　辰夫(蠶一七)　早乙女德藏(蠶一七)
關　辰雄(蠶一七)　西原　淳一(蠶一七)
濱　節雄(蠶一七)　宮堀　俊雄(蠶一七)

北條五郎右衛門(雇一)
上杉慶次郎(雇八)
河淵　益美(雇八)
三瓶常四郎(雇八)
永井　眞吉(雇八)
古川　正喜(雇八)
工藤　實司(雇九)
千吉　良幸(雇九)
戸部　正久(雇九)
山浦　卓郎(雇九)
駒井　慶治(雇一〇)
芝野　三郎(雇一〇)
角田　牧(雇一〇)
宮入　保(雇一〇)
矢野　宗彦(雇一〇)
荒木　喬(雇一二)
塚本　優(雇一二)
蓮沼　光治(雇一二)
菅木　幹夫(雇一三)
酒匂　景雄(雇一三)
田近　肇(雇一三)
吉池　權五郎(雇一三)
岡庭　武治(雇一三)
北原　至(雇一三)
高橋　悟(雇一三)
小木曾　眞佐雄(雇一四)
馬場　順一(雇一四)
渡邊　雪雄(雇一四)
中西　金(雇一五)
上原　眞德(雇一六)
萩原　和夫(雇一六)
齋藤　重利(雇一六)
秋山　幸夫(雇一七)
伊藤　嘉三郎(雇一七)
小山　富治(雇一七)
田中　熙(雇一七)
前田　三郎(雇一七)
堀　久三郎(雇一八)
藤井　溫彥(雇一九)
井關　武雄(雇一九)
大池　恒(雇一九)
志賀　覺(雇一九)
美明(雇二〇)
白井　道男(雇二〇)
牧　松崎　昇平(雇二〇)
宮下　文四郎(雇二〇)
米澤　保正(雇二〇)

市川　敏三(雇八)
笠原　四郎(雇八)
河野　芳春(雇八)
竹内　直人(雇八)
中村　武男(雇八)
梶田　陞(雇九)
佐藤　克治(雇九)
塚田　庸男(雇九)
宮澤　岬(雇九)
若林　榮(雇九)
北澤　延榮(雇一〇)
高木　修(雇一〇)
遠山　玉人(雇一〇)
森川　博(雇一〇)
山崎　勝巳(雇一〇)
坂口　芳文(雇一一)
傳田　靜夫(雇一一)
内岸　恒一(雇一一)
小松　茂男(雇一三)
多田　作造(雇一三)
森山　甫(雇一三)
米澤　俊吾(雇一三)
小野　忠(雇一三)
久保田　不二夫(雇一三)
西澤　政人(雇一三)
加藤　沼二(雇一四)
堀口　稻三(雇一四)
内藤　康三(雇一五)
青山　武(雇一六)
江崎　勇雄(雇一六)
木内　庸一(雇一六)
山田東洋男(雇一六)
足立　光男(雇一七)
工藤　榮次(雇一七)
佐藤　三夫(雇一七)
福田　六郎(雇一七)
由井　喜久(雇一七)
山部　千幸(絲一六)
小平太(絲一九)
伊藤　猛(絲一〇)
小林　逸(絲一〇)
島田　林助(絲一〇)
藤森　明美(絲一〇)
松崎　昇平(絲一〇)
依田　實(絲一〇)
吉田　爲雄(絲一一)

金丸　功(絲一一)
新村　五郎(絲一一)
三宅農富榮(絲一一)
上木　忠士(絲一一)
田口　清一(絲一一)
中山　泉(絲一一)
武者　忠彥(絲一一)
河合式太郎(絲一一)
小菅　貞三(絲一一)
星野　智(絲一一)
渡邊　綱男(絲一一)
塚田　和磨(絲一一)
石原　二人(絲一一)
岡田　廣太(絲一一)
稅田　廣喜(絲一一)
笹川　嘉隆(絲一一)
田中　信重(絲一一)
土居　芳樹(絲一一)
松野　正(絲一一)
御子柴希太郎(絲一一)

高橋　英(絲一一)
松野　輝彥(絲一一)
有賀　茂(絲一一)
河野辨太郎(絲一一)
戸田　曖三(絲一一)
宮尾　行雄(絲一一)
横内　豊彥(絲一一)
神崎　閑一(絲一一)
田中　實(絲一一)
和田　幸一(絲一一)
內海　弘(絲一一)
中村　達(絲一一)
飯田　國藏(絲一一)
小田巳年生(絲一一)
佐多　直道(絲一一)
高橋　一郎(絲一一)
高尾三代治(絲一一)
中川　力男(絲一一)
牧野德太郎(絲一一)
若林　亨(絲一一)

入會金納入者

完納者

町田　博(雇一一)　長倉　稔(雇一五)

金拾圓也

福田　六郎(雇一七)

叙任辭令

現職員之部

叙從六位(九月十六日)　正七位　奥　正巳

叙從七位勵七等功七級　和田　主計

叙勵六等授瑞寶章(十二月十二日)

勳職員之部

叙勵五等授瑞寶章(十一月四日)　正五位勵六等　內田　浩

卒業生之部

朝鮮總督府郡守　木山　勝雄

陞叙高等官四等(九月三十日)

公立實業學校教諭　岩瀨　義夫

高等官五等待遇(十月一日)

同　原　茂

七級俸當分千五百圓下賜(九月三十日)

同

天田晉三郎

公立實業學校長ニ任ス、高等官四等待遇

石川縣立津幡農學校長ニ補ス(十月九日)

地方農林技師　野口　活也

十二級俸下賜(九月十六日)

同　吉村　眞作

八級俸下賜(九月三十日)

長野縣立上高井農學校教諭　陸軍曹長勳七等　古越　光明

公立實業學校教諭ニ任ス、高等官七等待遇

上高井農學校教諭ニ補ス(十月十二日)

地方農林技師　土屋茂一郎

十一級俸下賜(九月三十日)

公立實業學校教諭　古越　光明

願ニ依リ本職ヲ免ス(十月十四日)

勳七等　古越　光明

叙從七位(十月十二日)

公立中學校教諭　吉田　隆雄

年功加俸年額百四拾四圓下賜(六月十日)

從七位　梅村　義一

叙勵六等授瑞寶章(十月十五日)

地方農林技師從六位　菅澤　隆三

叙正六位、高等官四等待遇(十月二十四日)

地方農林技師　西　孝重

九級俸下賜

公立實業學校教諭　近藤　正巳

七級俸當分千五百圓下賜(以上九月三十日)

從五位勳四等　田口　敏夫

叙正五位　正七位　岩瀨　義夫

叙從六位(以上十月十五日)

地方農林技師　久保田正樹

同　芝　荒雄

同　長瀨　深見

同　岸野　潤一

高等官三等待遇

同　水谷　郷一

同　好士　泰造

地方商工技師　山田　斧一

高等官六等待遇(以上十一月一日)

公立實業學校長　天田晉三郎

八級俸下賜(十月九日)

農林技師　田口　敏夫

全日本絹織物工業組合聯合會主催絹織物標準品展覽會審査官ヲ命ス(十月三十日)

公立實業學校教諭　石川　建丸

七級俸當分千四百九拾圓下賜(九月三十日)

同　古越　光明

八級俸當分千參百八拾圓下賜(十月十二日)

菅澤　隆三

叙勵六等授瑞寶章(十月二十四日)

公立青年學校　佐村　和夫

公立青年學校鹽田村外四ケ村學校組合立石城實踐女學校長ニ兼補(十一月五日)

農林技師兼生絲檢査所技師、蠶業試驗場技師　田口　敏夫

陸軍少尉正五位勳四等

兼任商工技師、叙高等官三等、織維局勤務ヲ命ス(十一月七日)

地方農林技師　藤　勝四郎

高等官三等待遇、叙從五位(十一月七日)

願ニ依リ本職ヲ免ス(十一月八日)

左右田　武

叙從七位(十一月一日)

小松　茂久

本校辭令

囑託　阿久澤　清

囑託ヲ解キ副手ヲ命ス

絹紡織科兼織維化學科勤務ヲ命ス(九月三十日)

山邊　十一

雇ヲ命ス

絹紡織科勤務ヲ命ス(十月二十二日)

三宅　太

副手ヲ命ス

絹紡織科勤務ヲ命ス(十月三十一日)

副手　小川　泰弘

同　松田　眞二

願ニ依リ副手ヲ免ス(十一月十六日)

副手　瀧川　春夫

願ニ依リ副手ヲ免ス(十一月三十日)

齋藤　重利

副手ヲ命ス

織維化學科勤務ヲ命ス(十二月二日)

支會通信

十五年度群馬縣支部總會

十月十七日群馬縣千曲會支部總會を前橋市内榮町まいだやに催す。實は頭初第二日曜日の十三日を選んで會員諸兄に御通知を出しお返事迄貰つたのであるが久方振りで田口敏夫技師の中央に於ける新體制下の蠶絲事情を伺ひたいものとお都合を質して見ると十七日なら都合が良いとの事で急遽十七日に模樣替へをしたのである。お集りを願つた方はこの寄書きにある通り前校長針塚長太郎先生、本部派遣林理事、東京支會より田口敏夫技師、外二十一名、メめて二十四名の盛會であつた。開會定刻三時より約一時間遲れて開會したのはいささか新體制に添はぬ憾があるが、之れは田口技師來橋を好機に前橋商工會議所に於いて蠶絲業各種系統團體主催の懇談會に特に所望されて蠶絲業の新體制とも稱す可き中央に於ける近時の蠶絲事情に付いて講演あり、續いて質疑應答があつた爲め順次遲れたのでやむを得なかつたので毎度遲れると言ふ譯ではない。

織田支會長の例に依つて圓轉滑脫の開會の挨拶から始まり、林理事の社團法人千曲會第一回總會決議事項、記念講演會支部要望事項等の本部としてお挨拶が型の如くあつて愈々本日聽かんと欲する田口技師の蠶絲業の現況と將來に付いて約一時間に亘つて蘊蓄を傾けての熱演を聞くことが出來、集會者一同我が意を得たりと言つた感であつた。次いで前校長針塚先生の「猶太人の世界の陰謀」と題する最新國際知識のお講話を聞き興味深々たるものがあつた。續いて勢多農林の田口教諭の滿洲視察談があり總會終了、例に依り懇親會に移つた。お蔭で酒の方が大餘りで幹事は轉手古舞、會場は狹くサービスは悪かつたが知的收穫は今迄にない收穫であつた。おまけに歸りには岡部横山兩先輩寄贈に依る『軍國の母』と題する田口教諭先輩の軍國美談を掲載した小册子を貰つて來た。

本日の集會者中比較的出席の少なかつた青年層會員諸君に是非共聽いて置いて貰ひたかつた事が澤山あり殘念に思つた。選んだ日が二度になつたり祭日の爲めもあつて青年層會員の出席率の少なかつたことでもあらう。この種會合は新體制下に於いて今回の如き効果的のものにして欲しいものである。(小山記)

飯田兄の入營を祝して

(一心會)

十一月二十三日夜　於上野聚樂

入營！　それは日本臣民の最大の喜びである。國家の干城として、全ての社會の煩惱を忘れ、自我を脫し、只管報國の誠を盡すことの出來る喜びがある。我々絲二七回のクラスにもその榮譽をうけたものが多數ある。飯田もその一分子だ。

今日は巨體の飯田を主賓にしてクラス東濱須の一心會の心からなる壯行會を催した。集ふ者十一人、飯田、笹川、松野、湯本、竹内中村、高尾、海野、若林、高橋そして河野。

× × ×

六時半より例によつて酒を飲む。飯田は今迄上田を通じて酔つたことのない酒豪、皆が更にすゝめる。ほどなく皆がメイテイ、飯田の伊那節、海野の大洗節、中村の上田小唄、きては若林の聲高らかに歌ふ樣、意氣と感激で暮した上田生活そのものだ。飲め、歌へ、上野の森のさける迄。

九時湯本の音頭で飯田の健闘を祈つて萬歲三唱して終了。

飯田よ更に奮闘を祈る。

× × ×

この會に於てクラスメート入營者、飯田を始め小田、田中、岸本、土居、田代、中川諸兄の入營を祝し、奮闘を祈つた。併記する次第。

(秀木)

訃報

菅澤　隆三氏逝去

栃木縣廳在勤の菅澤隆三氏(蠶二)は十月二十四日胃病にて逝去された。謹んで弔意を表する次第である。

西谷　剛一氏逝去

御幸毛織庄内川工場勤務の西谷剛一氏(紡一八)は今春應召中支戰線に活躍中であつたが九月十一日名譽の戰死を遂げられる。謹んで御冥福を祈る次第である。

土屋　安治氏逝去

福岡縣繭檢定所に居られた土屋安治氏(絲二二)は應召中罹病、解除後長野縣南佐久郡切原村に歸鄉療養中であつたが去る十一月十四日逝去された。謹んで御冥福を祈る。

北本　重郎氏逝去

日本製絲株式會社米子工場長の北本重郎氏(絲七)は本春來病氣療養中の處病革まり去る十一月十日逝去された旨小野正男氏より通知があつた。謹んで御冥福を祈る。

弔慰金募集

故原　治夫氏(蠶二十)
故千吉良長二氏(紡十六)
故田中福雄氏(蠶二二)
故大石卓壽氏(蠶二二)
故西谷紡一孝氏(蠶十八教)
故小池剛氏(蠶廿二)
故菅澤隆三氏(蠶廿二)
故土屋安治氏(絲廿二)
故北本重郎氏(絲八)

以上九氏に對し弔慰金を募集致します。故原氏、故千吉良氏、は十二月末日、故田中氏、故大石氏、は昭和十六年一月末日、故小池氏、故菅澤氏、故西谷氏、故土屋氏、故北本氏は昭和十六年二月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから夫れに間に合ふ樣振替口座東京四三三四一番へ各故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十五年十二月

千曲會

死亡會員遺族よりの禮狀

昭和十五年十一月二十四日

故齋藤利雄氏　山梨縣西巽郡今泉村

父　齋藤利七

弔慰金報告（十一月二日現在）

故齋藤利雄氏弔慰金　金貳圓也　累計金參拾七圓也　福地
故原治夫氏弔慰金　金五圓也　金參圓也　都丸
金貳圓也　晴治
有合計金四拾八圓也　香山清和　橋本正
累計金六拾八圓也　有我
故千吉良長二氏弔慰金　河野彰夫　塚田唐太郎
金壹圓也　累計金壹圓也　森田太郎
故田中福雄氏弔慰金　金五圓也　累計金五圓也　唐澤清和
故大石卓爾氏弔慰金　金參圓也　金參圓也　高畠會
有合計金貳圓也　有合計金貳圓也　岡部正三郎
故菅澤隆三氏弔慰金　金五圓也　金參圓也　唐澤平
金參圓也　有合計金拾圓也　高畠彌平
故小池寧氏弔慰金　金參圓也　有合計金貳拾圓也　高畠曲秀男
金參圓也　金貳圓也　高畠曲秀男
小關悦郎　有合計金貳拾圓也　高畠曲秀男
故久芳太三氏弔慰金　金參圓也　累計金參拾四圓也　平野庄一
故原治夫氏弔慰金　金參圓也　金貳圓也　大山融
金貳圓也　駒井慶治郎
金壹圓也　松谷鑛之助　渡邊正男　濱田成一
右合計金拾八圓也　累計金六拾六圓也　北澤延榮
故千吉良長二氏弔慰金　金貳圓也　瀧澤通　櫻野貞雄　遠山正人
故大石卓爾氏弔慰金　金貳圓也　累計金九圓也　松本浩

弔慰金報告（十二月五日現在）

故大石卓爾氏弔慰金　金貳圓也　五拾錢也　穂坂小牧
金貳圓也　累計金壹圓也　坂田榮雄　倉澤美德
右合計金七圓也　累計金拾七圓也　佐々木兼二
故田中福雄氏弔慰金　金貳圓也　五拾錢也　穂坂小牧
金貳圓也　五拾錢也　坂田榮雄　倉澤美德
右合計金六圓也　累計金拾六圓也　坂田榮雄　倉澤美德
故菅澤隆三氏弔慰金　金貳圓也　五拾錢也　坂田榮雄　倉澤美德
累計金貳拾四圓也
故齋藤修一君弔慰金（同級生扱第二回）　金參圓也　戸塚
金壹圓也　武井仙太郎
右合計金八圓也　小木曾眞佐雄　堀口稲三
累計金貳拾八圓也
故植村滿巍君弔慰金（同級生扱第二回）　金貳圓也　堀口稲三　武井仙太郎
右合計金七圓也　累計金貳拾四圓也　五拾錢也

久芳大三君の英靈に對して

平野庄一

君が戰死された事を知つたのは僕が再度の渡支の途中偶然にも舊恩師谷大佐先生と山西省の榆次でお逢ひしたとき承りました。あの元氣な君が亡くなられるなんて最初は全然信じられなかつた。亦夢にも思つて居なかつた。上田の飛校、懐しい千曲川の邊り、修已養へ君と一緒に新人生として入つた時君は確かに九號室だつたね、僕が五號室で一緒に同じ釜の飯を食つたもんだつた。又君と僕とは同縣人で何やかと助け合つたもんだつた。あの當時親のすね噛りで月末になると必ず財布の底が空になつて來る。すると必ず俺の下宿へおしかけて來たもんだ。君は又大のお人好しで家から實彈が飛んで來るとすぐ又僕の下宿へ來ては『行かう』と誘つて呉れたものだ。その時は早や君の顔色を見たゞけで何の爲に來たか直ぐ知つた。それ程實彈が來ると人の變つた樣に朗らかになる君だつた。處が又定つて二、三日の中に全部と云ふ位瞬く間に空包にしてしまふ。僕が屢々君に『そんなに來たからと云つて目茶々々に費つてはお家の方で……』なんて云ふと、君は『否こういふ實包を持つてると何時爆發するかも知らん危險この上なし、早く空包にしてしまはぬと氣持が惡い』。君は又大の食道樂だつた。海野町だつたか太田の果物店、それから塩川、昌平堂又川邊りにあつたやぶ、又大門町の旌屋等々何處の主人も君の店前を通るのを見ると人一倍丁寧におじぎをする。以て君の實彈射擊の消費方向の奈邊にあるかを知つたものだつた學生時代には左の方はあまりいけなかつた。でもビールは大の好物で、縣人會、クラス會スタート會等には定つてビールで、寒いあの雪の降る信州上田のある晩には必ず片手にビールで頑張つて居たよ。又君は非常な謙讓家で何日もクラスの者から親しまれて居た。君は何と云つてもクラスではジャンソーリストピューローなる異名を有つて居た程旅行家であり、又學校第一の旅行案内係を以て自他共に許して居た。學期試驗が終つて樂しい我實へ歸る時、或は工場實習に出發するとき、汽車の時間や乘替へは必ず君に質問すると何と不思議だらうかと思はれる程即座に教へて呉れた。之れには全く感服させられた。何時何分に上田發として何時何分に篠井着、それから鹽尻迄何時間等々仲々詳しい。一緒に卒業して君は郷里の近くの橋本毛織に勤務された。その間にもよく旅行の事は君に尋ねたもんだつたその内に一宮の方へ轉勤された。僕が應召して大阪の勤務先から歸郷する時一宮で君と福島君と逢つたのが君と最後だつた。間もなく僕は渡支、そして一時歸國すると君も又應召して渡支したのを知つた。多分部隊名は水原部隊で由の中で苦勞してゐると云つて來た。小生再び渡支、間もなく君の戰死を聞いてびつくりした。同縣人、同期生、君は亡つて淋しいよ。且つては長距離のチャンピオン、上田の當時運動會にはマラソンの選手で我が紡織科の間によく活躍してくれたものだ。想出してみると懐しい事共が次から次に浮出てくる。そして未だ君は生てゐる。そして帝國の軍人で第一線で活躍してゐると思はれてならない。前途有爲な君、もう話も出來ないのか、武運强く凱旋出來ても君が居なかつたら淋しい事だ。君は到々亡つた、亡つたのだね。否然し君の靈は永遠にこの大陸に居るのだよ、話してくれよ、嚀もう泪が流れるのみだ。どうか安らかに眠つて呉れ給へ。

久芳大三君萬歳。

故田中福雄君を追想す

徳島にて　上原清夫

先日田中福雄君逝去の報に接し、其の病狀なり經過なり知るに苦しみしが、千葉の高畑秀男君の千曲時報に載せられた記事に依つて詳細を知り今更ながら在りし日の田中君の面影を偲び一入哀悼の念禁じ得ないものがある同君は私の千葉縣廳在職中に交友が始まつて以來十五ケ年となる。始めて千葉の蠶業試驗場に轉勤せられる時は特に思出深い因縁がある。大正十五年九月頃と思ふ。私の樣に白詰襟の服を着しタオルを握つて汗を拭い乍ら私に面會を求めた村夫子然とした老人があつた名刺を見て始めて時の東京市長前警視總監西久保弘道氏である事が判つた。思ひかけぬ來客に私は椅子をすゝめ用件を伺つた。西久保氏は實に朔の田中君の千葉縣への轉任問題で來られたのであつた。早速時の内務部長山下謙一氏（後に德島、熊本縣知事となり退職せられた）を部長室に尋ね懇々と依頼して歸られた事を記憶する。夫れから田中君の轉任問題が進捗し久保氏から私宛の親展書を發見した。私は數日前に文庫を整理して西久保氏から私宛の親展書を發見した。この手紙を繰返して讀む毎に當時の田中君の潑剌たる姿を思ひ、今は亡き同君と西久保弘道閣下を偲ぶ事一層深きものがある。今其の時寄せられた西久保氏の親展書を披露して田中君の冥福を祈りたい。

拝啓　先頃は參上失禮申上候田中の身上につき色々御高配賜はり御禮申上樣も無之候は先日山下内務部長より愈々都合相付候事情申上方報有之候故長野縣知事へ許容方迚べ千葉縣へ共其後の模樣如何に候哉依頼致置候へ御話の上御洩し被下候はゞ此上仕合に有之候

右御依頼申上度　草々不悪

十一月五日　弘道

上原清夫殿

斯くの如くにして話はすゝみ遂に千葉縣へ榮轉して來られたのであつた。

會員動靜（十二月五日現在）

目崎三郎（現職）大洋沼津研究所技師（沼津市）
菅隆澤三（蠶一）一〇月二四日死亡（遺族）宇都宮西原町二、九九五　菅澤弘典
小澄晋（蠶二）肥後製絲原蠶種製造所（熊本縣八代郡高田村高下二四八）
鹽見豊一（蠶四）山口縣蠶業取締所柳井支所長（玖珂郡柳井町）
天田春三郎（蠶五）石川縣立津幡農學校長（河北郡津幡町）
天野末治（蠶九）名古屋市東區外堀町二ノ七　裁判所正門前　法律事務所　辯護士電話一九八二（住）岡崎市外岩津町西阿知和
武本本治（蠶一三）昭榮製絲本庄工場（埼玉縣本庄町）（舊、東京千曲會）
矢野昌雄（蠶一三）一〇月二五日召集解除（住）兵庫縣氷上郡和田村小畑三四九
古越光明（蠶一四）北支通州中學校（舊、北信千曲會）
中島角太郎（蠶一四）熊本縣蠶業試驗場（熊本市出水町）（舊、北信千曲會）
町田正直（蠶一四）埼玉縣立川越農蠶學校（川越市小仙波）（住）川越市通町一、三〇三（舊、熊本千曲會）
小山哲夫（蠶一四）熊本縣立阿蘇農業學校（阿蘇郡宮地町鹽塚）（住）仝上第二農場住宅（舊、兵庫千曲會）
片山次夫（蠶一五）當田館製絲所（上田市）（舊、岐阜千曲會）
富秀雄（蠶一六）鹿兒島縣蠶業試驗場大島支場（大島郡名瀬町）（舊、北九州千曲會）
宮本清松（蠶一六）石川縣立松任農學校（石川郡松任町）（舊、北信千曲會）
金峰義松（蠶一七）（舊、金炳龍）（勤）平安北道鐵山郡廳
坂口孝保（蠶一七）公州公立高等女學校（忠淸南道公州）（住）仝上（舊、三重千曲會）
石田馨（蠶一七）岡山縣廳內蠶業取締所（住）岡山市七日市町七
野里秀直（蠶一七）岩手縣蠶業取締所千厩支所（東磐井郡千厩町）
六川忠一郎（蠶一八）新興人絹大竹工場（廣島縣佐伯郡大竹町）（住）仝上社宅
勅使川原薫之助（蠶一九）宇都宮商業學校（宇都宮市外大會）
佐藤克治（蠶一九）岩手縣蠶業取締所遠野支所長（上閉伊郡遠野町）（住）遠野町石倉
宮澤岬（蠶一九）那是製絲大邱出張所（大邱府上町）（舊、北九州千曲會）
仁尾幾郎（蠶二〇）召集解除（勤）江原道蠶業取締所江陵支所（江陵邑林町）
有我彰夫（蠶二〇）片倉普及團（松本市蠶玉町）
渡邊正男（蠶二〇）仝右（舊、北信千曲會）
大野孝治（蠶二一）廣島陸軍病院基町第二臨時分院第五〇號第六番室
坂口芳文（蠶二一）埴南農蠶學校（長野縣埴科郡坂城町）（舊、熊本千曲會）
西原廣（蠶二三）戴寧那廳（住）黃海道戴寧郡戴寧邑菊花里三六
丸川貞雄（蠶二三）宇都宮東部三六部隊伊藤隊
渡邊善次（蠶二三）千葉縣陸軍習志野學校幹部候補生隊第一區隊
小野忠（蠶二四）南洋拓殖株式會社（南洋ヤップ島コロニー）
本居高行（蠶二五）中支土橋部隊
兒玉貫吾（蠶二五）仙臺陸軍教導學校機關銃隊第三區隊
市川信二（蠶二五）北支第二野戰鐵道司令部濟南支部
會田誠司（蠶二五）福岡縣蠶業試驗場（福岡市外大野村）
二木三雄（蠶二五）中支第一〇二野戰郵便局氣付
生天目久平（蠶二五）北支長谷川（美）部隊
宇田哲郎（蠶二六）灣本校繊維化學科奥研究室（舊、東京支會）
齊藤重利（蠶二六）千葉市陸軍歩兵學校教導聯隊第五中隊第五班
小山長雄（蠶二六）滿洲國齊々哈爾市〇〇部隊氣付（留守宅）上田市下紺屋町　小林勇司
小林茂（蠶二六）滿洲國北安省立克山國民高等學校
上原眞德（蠶二六）豊橋陸軍豫備士官學校砲兵生徒第四中隊第三區隊
近藤員矣（蠶二六）福島縣相馬郡原町南新田榮町六七（舊、越佐千曲會）
有間正久（蠶二六）横須賀海軍工廠機關實驗室第三科（横須賀市）
山田次男（蠶二六）松本市東部第五〇部隊太田隊二
秋山幸夫（蠶二七）松本市東部第五〇部隊服部部隊二
佐藤三夫（蠶二七）華中蠶絲鎭工蠶業場（中支鎭江省府路一號）
濱村長久（蠶二七）入營
北村元三郎（蠶二七）仝
小川泰弘（蠶二七）仝
足立光男（蠶二七）仝
瀧川春夫（蠶二七）多賀高等工業學校（茨城縣日立市助川町）（舊、北信千曲會）
細川三郎（蠶二）上田市職業紹介所（住上田市諏訪形）
飯島直（蠶三）全國繭絲商共同施設組合（東京市）（舊、神奈川千曲會）
船越重勝（蠶五）東邦商事合資會社（東京市日本橋區通一丁目國分第二ビル）（住）從前通り
渡邊亘（蠶七）東洋精麻加工株式會社（滿洲國吉林市外哈達營）（舊、近畿千曲會）
甲田勝衛（蠶七）郡是製絲和知工場長（京都府船井郡和知村）（舊、山陽千曲會）
北本重郎（蠶八）一一月一〇日病死
大野久藏（蠶八）通稱久七（自營）馬込幼稚園、仝佐藤分園々主兼園長（住）濱松市上池川町二三六（通信先）
栗栖忠士（蠶一〇）淺野鑛業所（北海道西龍郡沼田村淺野）（舊、山陽千曲會）
山岸寅雄（蠶一〇）昭榮製絲下諏訪工場（長野縣諏訪郡下諏訪町）（舊東京千曲會）
赤津辰男（蠶一二）川區三ッ澤中町四三（舊、神奈川千曲會）
蛭田修三（蠶一二）日本副蠶絲統制株式會社（東京市麴町區四ノ七）（住）横濱市神奈川區三ッ澤中町四三（舊、神奈川千曲會）
佐藤季子男（蠶一三）神榮生絲輸出部（横濱市中區本町）（住）横濱市神奈川區松ケ丘七
村田儲宜（蠶一三）昭榮製絲株式會社（東京市日本橋區吳服町東京建本ビル）（舊、諏訪千曲會）
竹添祿郎（蠶一四）鹿兒島縣製絲業組合（鹿兒島市易居町四五）（住）鹿兒島市薩川町一〇五
正木章三（蠶一六）神奈川縣七里ケ濱惠風園
杉山一雄（蠶一六）三井物產株式會社（横濱市中區日本大通）（住）横濱市神奈川區桐畑二
佐藤東平（蠶一七）藤本絹織有限會社（上田市日出町）（舊、東京千曲會）
野田太郎（蠶一八）朝鮮總督府企畫部第二課（京城）
中尾知則（蠶一九）奈良縣經濟部農務課（奈良市）（住）大阪市港區魁町二ノ三
延命幸次（蠶一九）石川縣鹿島郡越路村武部（舊、神奈川千曲會）
林宇一（蠶一九）大口本生絲販賣購買組合聯合會（横濱市中區北仲通六ノ七七帝蠶ビル）（住）横濱市神奈川區平川町平川莊（舊、山陰千曲會）
牧道男（蠶二〇）全國製絲業組合聯合會（東京市麴町區有樂町一ノ七　蠶絲會館內）（住）從前通り（一〇月千曲時報訂正）
服部彌一郎（蠶二〇）航空研究所講習生（東京市目黑區駒場町）（舊、岐阜千曲會）
須江辨三郎（蠶二〇）南佐久郡野澤町大字跡部三六

小井土英二（絲二一）
征矢　克郎（絲二一）
吉田　爲雄（絲二一）
岡田　重一（絲二二）
中村壽惠男（絲二二）
土屋　安治（絲二二）
山村　洋介（絲二二）
星野　安宏（絲二三）
西原　美登（絲二四）
市村　正（絲二四）
土屋二三男（絲二四）
和田　利章（絲二四）
東畠藤次郎（絲二四）
小松　忠幸（絲二五）
太田　速雄（絲二五）
濱田　浩（絲二五）
吉川　啓人（絲二五）
日輪　映一（絲二五）
中島　德健（絲二六）
石西　正美（絲二六）
中錦藥久郎（絲二六）
鹽入　重雄（絲二六）
佐藤　俊郎（絲二六）
鈴木　逸（絲二六）
笹川　嘉隆（絲二七）
姜　飢洪（絲二七）
河西　尙一（紡一一）
高橋　利光（紡二一）
稚氷　茂（紡三一）
大谷　準人（紡七一）
藤田　齊（紡八一）
竹內　榮（紡九一）
山手　信男（紡九一）
桐本他喜男（紡九一）
平野　岩夫（紡一一）
丸山　力藏（紡一一）
立木　一千（紡一二）
藤井爲五郎（紡一三）
町田　志敏（紡一三）

應召（留守宅）長野縣小縣郡丸子町中丸子
北支田邊部隊（留守宅）長野縣上伊那郡南箕輪村　父　征矢唯治郎
舊姓　池田（勤）片倉下諏訪製絲所（長野縣諏訪郡下諏訪町）電話下諏訪六、岡谷二八七九（舊、岐阜千曲會）
東京市赤坂區一ッ木町　東部第六二部隊安藤隊
愛知縣豊橋市魚町三一（舊、山陽千曲會）
一〇月一四日病死
片倉湖南工場（神奈川縣藤澤市辻當）（舊、福島千曲會）
興亞紡織工務部（名古屋市昭和區熱田東町東起）（住）從前通り
海軍航空技術廠飛行機部（住）横濱市磯子區金澤町一二八　弁原三武良方
平安北道廳農務課（新義州府櫻町）（住）新義州府常盤町七ノ四
傭後屋方（舊、鹿兒島千曲會）
全國產業組合製絲組合聯合會（東京市麴町區有樂町一ノ七　蠶絲會館內）（住）東京市淀橋區西大久保二ノ二〇五　田中周衛方
北支沼田部隊
召集解除（住）佐賀縣唐津市川口町
滿洲國興安北省ハンダカヤ野戰郵便局氣付　陸軍少尉（留守宅）
長野縣諏訪郡川岸村五二五　小松小一郎
中支田中部隊　見習士官
死亡
多賀高等工業學校（茨城縣日立市助川町）
北支田邊部隊
濱田西部第三部隊（住）島根縣鹿足郡津和野町後田四三一
南支松井部隊
豊橋市陸軍豫備士官學校歩兵生徒隊通信中隊第一區隊
松本市東部第五〇部隊小林隊
愛知縣中島郡祖父江町山崎（舊、丹綾千曲會）
愛知縣海部郡津島町南門前町一、八五五（舊、神奈川千曲會）
（勤）從前通り（住）横須賀市追濱區浦郷村二六三六　山翠莊內
郡是裝絲清州工場（朝鮮清州邑）（住）仝上
（勤）ナシ（住）岸和田市南上町一、三三一
近江實習工業學校（彦根市西馬場町）
滿洲移民協會滿蒙開拓館（新潟市驛前）（舊、東京千曲會）
愛知縣毛織物檢査所名古屋支所（名古屋市）
近江帆布宇和島工場（愛媛縣宇和島市日振新田）
壽織維工業高岡工場（高岡市上關八八八）（住）從前通り
（住）上海西幸德路一五九　大利莊內
奥羽紡績株式會社（富山縣婦負郡西奥羽村）（住）仝上
兵庫縣警察部外事課（神戸市）
商工省高岡輸出絹織物檢査所（高岡市）
石川縣織物檢査所小松支所（小松市殿町七七）（住）小松市大川町七四　富澤文次郎方
（住）三重縣河邊郡大里村野崎
岸和田紡績津工場（三重縣津市）（舊、近衛千曲會）

淺治裂裝男（紡一三）
沓掛　祥平（紡一五）
土屋　勉（紡一五）
佐藤　佳良（紡一六）
福島　虎（紡一六）
矢崎　勝（紡一六）
尾和　博行（紡一六）
伊藤　二男（紡一七）
金井　忠義（紡一七）
小林　龍太（紡一七）
齊藤　生實（紡一七）
高橋　卓爾（紡一七）
福島　庸（紡一七）
永井　千治（紡一七）
高橋　卓爾（紡一七）
平林　孝方（紡一七）
飯田　武門（紡一八）
鷹取　稔（紡一八）
古平　太三（紡一八）
西谷　剛一（紡一八）
金子　平夫（紡一九）
三宅　太（紡一九）
田中きみ子（舊　教）
高寺　穗子（舊　教）
鹽入　治子（舊　教）
堀內　波（舊　教）
宮本　つね（舊　教）
佐藤　かち（舊　教）
飯島　六（教二）
井上　すい（教三）
木下とみえ（教四）
榊原　弘子（教四）
仲藤　潮（教四）
林　正枝（教四）
多田　滿（教四）
藤森ふじ子（教五）
山寺　孝（教五）
相馬　ナツ（教六）
大瀧　廣子（教六）
荒木　梅子（教七）
石井よしみ（教七）
村尾はつ江（教八）
笠井　里志（教八）

中華人造繊維三原事務所（住）廣島縣三原市館町六〇二ノ一四五
鐘紡丸子工場（長野縣小縣郡丸子町）
長野縣蠶科農學校（北佐久郡芦田村）（住）芦田村古町　奥屋方
横濱稅務署
中部第二九部隊谷隊
北支篠塚部隊
沼津毛織株式會社（沼津市）
朝鮮羅南第八部隊
哈爾賓軍事郵便局氣付青木部隊本部
中支豊島部隊
應召
滿洲牡丹江省掖河吉本部隊
大阪府三島郡高槻町　中部第二九部隊谷隊
南支後宮部隊氣付　陸軍々曹
滿洲國牡丹江省掖河　吉本部隊氣付
陸軍被服本廠理化學部　陸軍主計少尉（東京市王子區赤羽）
入營
入營
中支土橋部隊氣付
九月一一日戰死（遺族）大阪市住居區播摩町東一ノ九
入營
本校絹紡織科
德島縣繭檢定所（麻植郡鴨島町）（住）仝上寄宿舍
東京府繭檢定所（東京府立川町）（住）仝上寄宿舍
上田市廐裏
（勤）從前通り（住）上田市前田町
大阪市住吉區北田邊町九〇
日本赤十字社廣島支部（廣島市）（住）廣島市大手町八ノ九六　能勢方
長野縣小縣郡鹽尻村秋和
長崎製絲諫早工場（長崎縣諫早町）（住）仝上寄宿舍
近藤製絲場（愛知縣高藏寺町）（住）仝上寄宿舍
上田市西脇町
長野縣下伊那郡亘開村
福島縣蠶業試驗場小野新町支場（小野新町）（住）仝上寄宿舍
舊姓　三戸部（住）奉天省鐵嶺市北五條通一七
長野縣小縣郡神川村大屋
農林省蠶絲試驗場（東京市杉並區高圓寺）
朝鮮總督府農事試驗場蠶絲部（京畿道水原）（住）仝上寄宿舍
昭榮製絲本庄工場（埼玉縣本庄町）
長野縣更級郡篠ノ井町布施高田七二六
多勢丸多製絲長岡工場（福島縣伊達郡長岡村）（住）仝上
長野縣小縣郡神川村下堀
長野縣上田市日之出町